転生迷宮

デオキシリボ核酸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生迷宮

【Ｎコード】

Ｎ０４６４Ｏ

【作者名】

デオキシリボ核酸

【あらすじ】

死後の世界“タルタロス”。そこに存在せしは、神様公認の娯楽と欲望が渦巻く“転生の迷宮”。来世で欲しいか？　富、名誉、力、記憶、チートにハーレム……すべて、すべてが思いのままの大迷宮！　挑みそして踏破せよ、さすればその望み叶えてみせようッ！！

零

神とは何なのだろうか？
――神とは、超越存在である。
ならば。世界とは何なのか？
――世界とは重なり合い、連なる内の一つの箱庭である。
では、肉体とは何であろうか？
――肉体とは鎧であり鎖である。
では……魂とは一体？
――魂とは本質である。

では、物質とは何なのか？
――愚問。物質とはオリジンの影である。
では、我々の世界は影であるのか。
――是。
オリジンに至る方法はあるのだろうか？
――是。それは本質的に神へと至る道である。

……
……
……

質問を変えよう。此処は何処なのか？
――笑止。その質問は答える必要がないゆえ。
是。では質問を戻そう。神へと至る方法とは？
――進め。そして昇れ。真実その資格があるならば、何れ到達することも、越えることもあるやもしれぬ。

……
私は誰であったのか……？
――誇れ。おぬしの願いは叶ったのだ。この会合は一時の猶予でしかない。
そうか。私は叶えたのか。
――是。ゆえに眠るがよい。次に目覚めたとき、新たな生が待っているだろう。最も、以前の記憶は覚えてはいないだろうが、な。
私の願いとは？
――笑止。知る必要のないことよ。

……
――誇れ、転生迷宮で己が望みを掴み取れるのは極一握りのみ。おぬしは胸を張ってよいのだ。
そうか。私は胸を張っていいのか。
――それにしても欲がない。望めば次生でチートな能力すら有せたのだぞ？
そうか。私は欲が無かったのか。
――ふむ……覚えておらぬのか？
是。覚えていない。
――致し方なき事よの。妄からの餞だ、知りたいか？
否。貴女が何故一介の転生魂に過ぎたる猶予をくれるのか、私には知る由もないが……
――ない、が？
消えゆく身だと、貴女は言った。なれば、必要無き事。
――そうか……ふむ、時間が来たようであるな。

……
……

名を。名を、教えてはくれまいか？
――もし、おぬしが再び迷宮に挑戦せし日が来たならばな。
そうか。では、私の名を……わ、たしの…な、は……
――知っておるよ……

何時の事か。何度目か。
時間も何も知れぬ場所で、一つの魂が己が願いを掴み取り、転生の門を潜った。
残されたのは一柱の神。
一人残された神は何を思うのか。
ゆらりゆらりと、消えゆくその姿。
最後に垣間見えたるは柔らかな笑みのみであった――――

零（後書き）

後書き

基本注意事項とうはプロローグにて記載予定。
更新は週二～三回程度を予定。
一話辺り三千文字をベースにする予定です。

まだまだ至らない身の作者ですが。
どうか完結までお付き合い頂ければと思います。

壹（前書き）

この物語の文章は作者の実験的内容が使われています。
主な内容は一人称と三人称の融合。
何言っているんだ？　と思われるかもしれませんが、ようは人称は三人称の癖に、地の文は見ようによっちゃ一人称にも見えたり、むしろまんまだったりする内容です。
それって使い分け出来ないだけじゃ……と思われるかもしれませんが、作者の他の作品を見ていただければそれはないだろうと、少なからず御理解頂けるかと思います。

上記の内容を許容出来る寛大な方のみ、どうか御観覧の程をよろしくお願い致します。

壹

世界は平和だ。
戦争なんて現代の日本人からすれば既に過去のもの。
無理せずに、分不相応の夢を抱かなければそれなりの幸せが約束された世界。
何時の時代も己が欲望を満たそうと足掻き、突き進み、まるでイカロスのようにやがては失墜して破滅へと転がり込む。
そんな輩が居るものである。

しかし、そんな望みを歩道を歩いている青年は抱かない。
生まれてこれより数えで二十歳。そこそこの進学校に進み、親の期待にそれなりに応えてそれなりの大学へと進学。
このまま卒業を迎えればそこそこの企業に内定で就職もできるだろう。
部活動も中学時代からそれなりにやってきた。一つに留まらず、色々と経験してはそれなりに楽しんできた。
バスケもバレーも剣道も、テニスも柔道も野球もサッカーも、全部がそれなりに楽しかったものである。

今日も講義は午前で終了したので、本屋に何か新刊でも出ていないかと立ち寄る途中だ。
友人に添加物一杯の、一部動画サイトで爆発的な感染力で教祖様と崇められている、某有名ジャンクなフードでも食べないかと誘われたが、どうも乗り気ではなかったため辞退させてもらった次第。
季節は八月も下旬。徐々(じょじょ)に涼しくなっていく季節、なんて妄想と期待は外宇宙を開く外なる神様の門。

その彼方にでも飛んで行ったのか吸い込まれたのか、あるいは秋の神様でもストライキを起こしたのか、今日も舗装された道路はゆらゆらと陽炎が立ち昇り、季節の代名詞とも呼べる奴の声。
寿命の短さの代わりと言わんばかりに大声量で騒ぎ立てるやつ……そう、蝉がミンミンツクツクと喧しくも大合唱。騒がしいことこのうえなしであった。

「……暑い」

思わず口に出してしまう。でも、仕方ないと思うのだ。
九月にも入ろうかという時期に最高気温が三六度なんて、きっと夏の神様は季節を勘違いしているに違いない。
今頃アロハなシャツで、観光旅行と洒落込んでいるのかもしれないが……
いっそもげろと言ってもばちは当たらないだろう。
そこでふと、そもそもその神様とやらは男性なのだろうかという、どうやらこっちまで脳をやられたかもしれない想像が駆け回りはじめる。

「ん？」

ふと、現代の大迷宮『ヒャクマンキュウジンコウトシ』の一角、その中央にある駅前から数分の場所に位置する場所。
欲望渦巻く『ハンカガイ』にある、現代の重要スキルを習得するのに必要な物資を売っている重要拠点、『ブックマーケット』へと向かう道。

その途中の『ハンカガイ』に位置するとある十字交差点、その丁度点滅を繰り返す信号の真ん中に一人の小さな少女が転んでしまったのか、取り残されているのが目に見えた。
周りを暑そうにしながら歩いていく人々が気づく様子は無し、舌打ち一つ。
浮かんだのは“またか”という言葉と、ここから走って何秒かかり、その後離脱が間に合うかどうか。
そこまでで僅か二秒未満。青年の数少ない特技“マルチタスク”技能の恩恵だ。

同時、大学どころか高校、中学。いや、自宅ですら一度も見せた事が無いほどの真剣な表情に切り替える。
足に力を込めてスターティング！　一体どこにそんな力を隠していたのか、オリンピック選手も、ついでにモアイも驚きの速度で少女へと向かっていく。
途中何度か人にぶつかりそうになり、罵声が飛んでくるが、そんなものは右耳から逆耳へと一瞬で素通りだ。
今重要なのはどうやら転び、足を捻ってしまった様子の少女を如何にして救うかの一点のみ！

信号の点滅が終わり、赤に切り替わり、無常にも少女に気づかなかったのか、自家用車のエンジン音。
丁度ボンネットのせいで姿は見えないのかもしれない。
またもや漏れるのは舌打ち一つ、それと僅かな焦燥感、残り距離数メートル、喧しいクラクションの音は無視。
足に全力を込め、飛び込みスライディングの要領で一時的な超加速！　素早く左腕で少女を抱きかかえる。
瞬間、車が動き出すのと同時。右手を地面につき出して飛び込み

の力を利用。倒立のように体を持ち上げ、そこから腕の力だけを頼りに体を押し込むッ！
オリンピックの身体選手にすら劣らないしなやかさで体躯が翻り、車道の奥、歩道の目の前の地面に鮮やかに着地。
間違いなく十点満点、拍手喝采、アンビリーバボー！

同時、多くの車が何事もなかったかのように走り抜けていく。
間一髪のタイミングだろう。混乱している少女の優しく微笑みかけ、歩道まで誘導してあげる。
しかし、そこで少女にとっては予想外。

「お、お兄ちゃん！」

そして青年にとっては予想外であはあるが想定内の事が起きる。

「ッッ！！」

上空から何かがブツリと切れる音、慌しくなる喧騒と隣に立つ少女の悲痛な叫び声。
“大丈夫、理解（わかっ）ている”、対処法も知っている。
了承を得る暇も惜しく、歩道で隣に立つ少女を両腕に抱えなおし、両膝をバネに見立て勢いよく踵に力を込めるっ！
瞬間、信じられない程の脚力により生み出された推進力は、間一髪、ワイヤーが切れて落ちてきた鉄骨から少女と青年を救い上げる。
ガラガラと音を立て周囲の建物に被害与える鉄骨の群れ。
騒ぎ立てる群衆などは無視だ。

そこで安心してはいけない。

注意深く意識を研ぎ澄ませる、と……何やら鉄骨とは別の飛来音。
鋭く空気を切り裂く音。
チリッと首筋が痛む、少女を抱えたまま右足を軸にターン。
半歩分素早く移動するのと同時、アスファルトに何かが突き刺さる！
ふぅと息を吐き、何が突き刺さったのかと視線を見やれば、ロープを吊るすための鉤状の物体が、フック船長よろしく突き立っていた。
それを確認してもなお集中力を研ぎ澄ませ……十秒経った後にようやくホッと力を抜き、少女を脇に下ろしてあげる。

「大丈夫か？」
「あ、あの、えっとその……あ、ありがとう！」

危機は去っただろう、首筋がチリチリと焦げ付くようなあの独特の違和感がない。
巷で表すなら“死亡フラグ”と“テンプレート”を見事に叩き折ったからだろう。

「気にするな。それより怪我は？」
「ううん、だいじょうぶ」
「そっか」

なら安心である。外国の血を引いているのか、柔らかな金髪をホッと一息吐いた後に撫でてやる。
手触りは極上、ふんわりと、そして柔らかな感触が何時までも撫

でていたくなるような、麻薬のような魅力。
吊り橋効果か、それとも少女にしかわからない感性か。
見ず知らずのはずの青年に撫でられても、少女は動かない、むしろ恍惚とした表情で感受している。

「エリサッ！」
「まま？」

現場に居れば警察やら何やらと公僕が煩いだろうと、その場から離れたあと。
暫く動かずに少女の不安を紛らわすついでに頭を撫で続けていれば、歩道の奥から少女を大人にしたような容姿をした女性がこちらに走ってくるのが見えた。
どうやらエリサと呼ぶらしい少女の母であるらしく、事の顛末をオブラートに包んで話せば、しきりに頭を下げて感謝の雨あられ。
思わず背中がむず痒く成る程だ、それも見目麗しい女性からなのだから、鼻の下もさぞ伸びきっているだろう……と、思いきやそうでもなく。

「どうぞ、顔を上げてください。自分としては当然の事をしただけなんです」
「いいえ！　この娘は夫の忘れ形見なんです……それを身体を張ってまで助けてもらったとあれば、謝罪だけではとても……それに、先程はやんわりと仰りましたけど、向こうに散らばっていた鉄骨。あれも関係あったのでは？」
「うん！　お兄ちゃんがね、うえからふってくるおおきいのをね、えいって、うさぎさんみたいにぴょんてよけたんだよ！　そのあと

にね、くるってまわったらじめんになにかささってびっくりしたよ」
「そ、そんなことまで」

顔を青くしたエリサの母親の反応に、思わずあちゃーと内心で溜め息。
本当に気にしていないのだ。そもそも“この程度”の事故なら日常茶飯事、偶々それが自分への矛先ではなく、“事故の起きる現場”に吸い寄せられるが如く向かってしまっただけ。
そして見れば少女が一人ピンチであり、経験則から迅速に行動、助け、そして更に今度は自身に降り注いだ“事故”を回避。
繰り返すが、“日常茶飯事”なのだ。それこそ運が悪いときは毎日のように起こるし、あるいは遭遇する。
信じられないくらいの、嘘のような事件体質（トラブルメイカー）、それが妙な星の下に生まれてしまった青年の毎日であった。

その後、結局エリサとその母親の懇願によって家まで同行。
一体何をどこで間違えたのか、少女を助けてみれば生粋のイギリス人だという眉目秀麗な女性と、ハーフであるのだが母親の血が濃いのか、母親を幼くしたような可愛らしい少女。
いや、幼女と称すべき身長のエリサとの二人に囲まれ、連れられやってきたのは高級住宅街にある一軒家。
むしろ屋敷と称しても支障のないそこで、勧められるままに昼食、更にはG．F．O．P物の紅茶までいただき、気づけば日が暮れる時刻。

誰そ彼時である。だれそかれ？　と訪ねたのが始まりであり、早朝の彼そ誰時と区別しての呼び名。

誰そ彼の黄昏時。立派なリビングから見える血のように赤い夕日を眺めながら、そんなどうでもいい事を考える。
そこでふと、随分長居してしまった事に気づく。時間に換算すれば最低でも五時間ほど。
しかもこのように助けた人に勧められ、食事や一時を共にすることはあれど、ここまで長く居たの初めてであった。
朴訥な青年と言えど、やはり美人な女性と将来有望な蕾の少女と一緒だったからだろうか？
エリサは無邪気にかまってかまって！　とキラキラした瞳で見詰めてくるし、その母親たる女性もそんな娘の様子に終始ご機嫌で、時折勘違いしてしまいそうになる視線もちらほらと。
これは不味いと、寂しそうに引き止める二人を丁寧な礼でしかし、きっぱりと帰りの主旨を伝え、

「何時でもいらっしゃって下さいね」

という女性の台詞を後ろに帰路に着く。
やや後ろ髪引かれる思いではある。しかし、一度首をぶるんと振り雑念を払う。
一度通った道筋だ、帰りに迷うことはないだろうと来た道を思い出しつつ歩き始める。
そこでそう言えばと、本屋に立ち寄るの忘れてたやと、今更ながらに思い出すのであった――――

壹（後書き）

後書き

三千をそこそこオーバーしておりますが、基本は三千前後でいきます。

迷宮とか書いといてなんですか、もう暫くお待ち下さい。

拙い作品ですが、感想・評価を頂ければ作者が喜び舞い踊るので、どうぞ宜しくお願い致します。

貳

夕日が現代の大迷宮『ヒャクマンキュウジンコウトシ』を遍く染め上げている。
素直に綺麗だと思う。珍しく今日の夕日は大きく、色も随分と赤い。
まさしく黄昏時、いや……降魔が時と呼ぶに相応しいだろう。
地形『コンクリートジャングル』に属したこの迷宮には、様々な魔物が出現する。
代表格と言えば『ココウノイヌ』や『ノラネコ』などだが、群れを成す『カラス』は一体の戦闘力はそうではないものの、その知能と嘴による貫通攻撃は侮りがたい。
状態異常（バッドステータス）の一つ、失明を食らえば戦闘は絶望的だろう。

他にも『ドブネズミ』と呼ばれる魔物は注意が必要だ。
奴らは一体見れば数体は潜んでいると思え！　と、そう言われる魔物であり、何より厄介なのは、状態異常（バッドステータス）『病気』を低確率で感染させてくるところだろう。
他にも南部に生息する『漆黒ノ悪魔』等は最悪と言える。
まず見た目がヤバイ、そして何よりしぶとい癖に素早い！　カサカサと音をたてては縦横無尽に動き回り、こちらの精神力（スピリットポイント）を削ってくる嫌らしい敵だ。
しかも時たま発動してくる『飛行』は悪夢めいた威力で有名である。
撃退したらしたで、置き土産に『タイエキ』というエリア魔法を残していく徹底ぶり。

このように、現代の迷宮には多くの危険生物が潜み、日夜冒険者（シャカイジン）や非冒険者（ガクセイ）を苦しめている。
最近では生産職（セイサンガイシャ）やその他によって、『漆黒ノ悪魔コロリ』などと言った、特定の種族に対して絶大な威力を発揮する武器が作られたりと、人類だってやられっぱなしという訳ではない。
しかし、何も敵は魔物ばかりではない。
冒険者ギルドでも悪質な『ヤミキンユウ』や『ヤクザ』、他にも『ゴクドウ』なども存在しているのだ。

大手ギルドである『ケイサツ』によって厳しく取り締まられてはいるが、一部は非合法な手段や癒着を用いて巧みに法の網を潜り抜ける組織も多い。
それだけではない。フリーランサーの中にはＰＫを目的とした『ハンザイシャ』。
更に分類訳をして、『カイラクサツジンシャ』や『ユカイハン』、それに『ヒトサライ』や『ゴウトウ』などはギルドに属していないことが多く、決して油断を許さない存在だ。
彼らは何時現れ不幸の鐘を鳴らしていくのか、誰にも分からないのだから……

「なんてね。題して現代ロールプレイングゲーム、中々売れそうじゃないかね？」

夕日を眺めながらも歩くの悪くは無かったのだが、ついつい埒の無い事を思考してしまう。
昔からどうも“迷宮”という言葉には強く惹かれる物があるらしく、もっぱらプレイするゲームもＲＰＧ系ばかりである。

読む小説なども、迷宮物が大半であるところを見るに筋金入りであった。
それにしてもと立ち止まりながら思う。いくら高級住宅街であり、繁華街や中心地、駅前などと比べれば人が少ない場所とはいえ、こうも“誰も居ない”のはおかしくないか？

誰一人出会わないのだ。そもそも人の気配さえ希薄どころか皆無である。
それに何か危険が迫ったときに知らせてくれる首筋に奔る警鐘。
それが今までとは比較に成らないほど痛みを発していた。
降魔が時。戯れで思い出した言葉であったのだが、自分自身が少しばかり日常から半歩程だが逸脱しているため、どうもその言葉を頭ごなしに否定できない。

「これは……本当にヤバイか？」

思わず漏れる言葉。今まで様々な出来事に直面してきたが、これほど“異常”な事態は正直初めてであった。
人が消えた都市。今更に気づいた事実だが、あれだけ喧しく騒いでいた蝉の鳴き声が止んでいる。
それに、と。“静止画の世界”のように雲が一切流れていないとあっては、もう決定的だろう。
どうやら自分は不可思議な世界に迷い込んでしまったようだと……
自分こそが超常の証たる、普段は隠している運動能力、及びそれに付随した五感をフルに稼動させる。

危機を知らせてくれるらしい首筋の痛みは、既に振り切った電極のように暴れ狂い青年を苛んでいる。
ともすれば、警鐘のはずのその痛みで集中を欠いてしまいそうなものだが、人一倍修羅場を潜って来たことによる胆力と、生まれついての痛みに対する耐性で無理やり押さえ込む。
本能が、あるいは魂とも呼べる部分が叫んでいた。“油断するな”と。
死神の鎌は既に己の首筋へと狙いを定めていて、一歩間違えば破滅が口を開けて待っているのだと、そう首筋の警鐘と第六感的感覚が囁いている。

何処から来る？　警鐘は鳴りっぱなし、かつてない程にだ、それなのに何時までたっても何も起こらない不気味さ。
――まるでこちらの隙を窺っているようだ……
その考えは荒唐無稽に思えてその実、五感とは別の感覚が正しいのだと囁きかける。
今までだって何度となくそれに助けられてきた。最早自身の半身とも呼べる感覚。
……冷や汗が背中を伝う、感覚を研ぎ澄ませて維持するのは途方もない体力と、そして精神力を消耗する。
今自分のステータスが見れるならば、ＨＰとＳＰが徐々（じょじょ）に減っていることだろう。

頬から流れた一筋の汗、それが地面にぽたりと垂れ落ちた瞬間――
キキキキィィイイッ――――――
それはまさに間一髪！　見晴らしがよいと選んだ十字路、背筋に走った悪寒に任せ勢いよくその場から飛び退る。

同時に通り過ぎたのは大型トラック。警戒は怠っていなかった、それでも“察知出来なかった”。
まるで突然現れたかのように、“近くから”急に音が聞こえたのだ。
ギリギリだが見事な回避を見せた後、再び聞こえてくるエンジン音！

「ざっけんなよっ！」

再び別の道から突っ込んで来たトラックを、回避した運動力を利用して独楽（こま）のように回転。
そのまま素早く近くの壁まで移動して回避。
今度は先ほどより余裕がある、座席に座っている犯罪者くずれを拝んでやろうとして――

「マジかよッ――」

キキキキキィィイイイッ！！
今度は同時に二ヵ所から迫り来る大型トラック。
それを近くにあった電信柱に素早く組み付き、スルスルと駆け上がり、電信柱にトラックが衝突する瞬間、一世一代の大ジャンプ！
迫っていたもう一台に乗り移り、そのまま再度小ジャンプ。
地面に着地する瞬間受身の要領で転がり、勢いを殺す。

「ッッ――」

それでも一回目のジャンプで、化け物染みた運動能力を有する肉体と言えど無理が祟ったか、膝に鋭い痛みが走る。
それよりもと、先程一瞬だが見えた座席、“無人”であったのだ。
いよいよ異常ここに極まれり、なんて考える余裕もなく、黒く細長い影が自身を覆う。
折れてしかも、こちら目掛けて倒れてきた電信柱を全力で転がり回避するッ！
膝に鈍い痛みが走るがそんなものは無視である、トマトの様に潰れてあの世行きなんて勘弁して欲しい。

「ぎりぎりかっ！？」

足を掛ける為の突起に上着が引っかかり、一瞬脂汗が滲んだがまだまだ運は尽きてないらしい。
上手い具合にするりと脱げ、巻き込まれずに済む。
どうやら第一波は潜り抜けたのか、ぜぇはぁぜぇはぁと呼吸を整えながらも、首筋のチリチリ感が小さくなったことに安堵する。
一体どうなっているのか説明して欲しいくらいであった。
脳裏に浮かぶのは最近読んだネット小説の“転生トラック”と言う文字と、“テンプレート”という文字。

成る程と、静まってきた動悸を確認しながら考える。
今までも何となくそうではないのか、そう思っていたが、今回のこれでもう確定だ。これ以上ないくらいである。
ここまで異常な事態を見せ付けられ、体験すれば否が応でもその存在を信じずにはいられない。
今までは半分冗談程度に思っていた知識だが、どうやらやっこさ

ん、とうとう堪忍袋の緒がちょん切れてしまったか、元から短いであろう忍耐の緒が、ポッキーを齧り尽くすが如き勢いで消耗してしまったようだ。
脳内麻薬でも大量に分泌しているのか、恐れるどころか、不思議な高揚感。
或いは狂った輩ならよっしゃぁああ！　と自分から死にに行くのかもしれないが……

「上等じゃねぇか。何所の何方様か知らないが、そのテンプレだか天麩羅だか知らねぇけどよ、全部旗折（フラッグクラッシュ）してやるぜ！」
「っと！　怒らせちまったのか？」

何所から飛んできたのか、ポール付きの看板をしゃがんでよける。
勝負は始まったばかり。向こうさんの執念勝ちか、それともこちらの根性勝ちか……

「最後まで見てのお楽しみってな！」

貳（後書き）

後書き

次回で現世編は多分終了です。
如何でしょうか？　この溢れるテンプレ展開！
次回は更に加速する天麩羅地獄！

え？　何か違う？
……いやいや！　人助け交通事故に転生トラック、ポール。
次話で出るのも含めて、テンプレの塊でしょう！？

参（前書き）

仕事が落ち着きました。
感想の返事今からします。

参

呼吸は落ち着いた。膝の痛みもどうやら捻ったか、あるいは打撲か。

脳内麻薬のお陰だかは知らないが、取り敢えずは痛みもさほど感じずに動ける。

首筋に奔る警鐘が徐々（じょじょ）に強くなっていく、向こうもお遊びはここまでということらしい。

深呼吸を一回、臓腑に染み渡らせるかの如く、酸素を行き渡らせていく。

“正しい呼吸法”を無意識に行っている自分に驚くも、今までも知らないはずの知識に助けられたことは一度や二度じゃない。

こと、この場面においては下手な奇跡よりずっと役に立ってくれるだろう。

これまた知らないはずの構えを取る。

無形、両手をだらりと下げ、全身の余分な力を抜く。

精神だけを研ぎ澄まし、“何処から来ても”対処できるようにする。

……

……

――来たッ！

「そう何度も同じ手ばかりじゃ、飽きてくるぜ！　もっとバリエーション豊かじゃないとなっ！」

キィーィィイイキキィッ！！
耳に響く音響。タイヤが急激な加速により地面と擦れる音。
十字路の、自身から見て真後ろから迫ったトラックを横に飛んで回避――

「んなっ！？」

しようとして、目前で急停止したトラックに呆気にとられる。向きを調整して再発進してきたトラックを体勢を崩しながらも何とか避ける。
この程度の浅知恵程度に引っ掛かりかけるなど、頭が痛くなるが、一瞬で速度を上げてくるそのエンジンはどうなっているのか？

「大盤振る舞いだなぁッ！　よっと」

壁を突き破り民家に突撃し爆発したトラックを尻目に、その背後から現れた二台目を余裕を持って回避する。
と、首筋の痛みが一瞬跳ね上がり思わず苦悶の声を漏らしそうになるが、次の瞬間聞こえた風切音に慌ててしゃがめば、頭上を通り過ぎる刃渡り三十センチ近くのダガーに顔が引き攣る。

しゃがんだ状態から両膝に力を込めて宙返り！
そのまま一瞬の浮遊感を感じた後、前を向けば先ほど青年が居た筈の位置、丁度頭があったあたりを通り過ぎる銀光。
後一秒でも遅ければ、首筋から真っ赤な花が咲いていたかもしれない。

そのままバックステップで数メートルの距離を取る。

追って来ないのか？　フード付の黒のサーコートの下に更にロングコートで身を包み、強盗がつけるような黒のマスクを着用。
これまた黒の手袋に握ったダガーをゆらゆらと不規則に揺らし、移動する気配を感じさせない。
狙いは何だ？　と思い一瞬地面に視線を向けた瞬間、垣間見えた影の正体を見極めるよりも速く、身体を捻って回避！
一瞬の差で突き込まれるのは波のような文様が美しい、どこからどうみても“日本刀”。
右にはダガーのマスク野郎で、左側には、オペラ座の怪人がつけていそうな仮面を付け、対照的に白装束の日本刀野郎。

脳裏にちらついた言葉は“テンプレート”と、“通り魔”の二つ。
成る程、そう言えばと、読んだ小説の転生の中には通り魔によって殺されて。
なんて展開が結構あった事を思い出す。
と、言っても……

「明らかに銃刀法違反な装備でもなければ、そんな怪しさ全開の見た目でも無かったとは、思うっがなッ！」

同時に迫ってきた二人（？）と称してよいのか、そもそもこんな異常な場で出会った人物だ、人間に分類してよいのか不明である。
その猛攻を人間離れした身体能力と、動体視力のお陰でぎりぎり回避していく。

正直刃物が首筋を掠めそうになるたび、脳内麻薬で麻痺した恐怖心が精神を焼き焦がそうとちらつくのだが、一瞬の迷いも許されない連撃が、逆にその恐怖心に囚われる時間を与えないとは、なんて皮肉か。

袈裟懸けに振るわれた刀をバックステップで避け、そこから踏み込まれ、逆袈裟懸けの切り上げを左周りに回転して回避。

後ろから迫ってきダガーの突きを、回転の勢いを乗せた回し蹴りをマスク野郎の腕に叩き込む事で防ぐ。

武道なんて心得は無い。しかし、まるで“身体が知っている”かのように動く。

ボキリと、嫌な感触を感じ入る暇もなく背後から振るわれる刀。夕日に煌く銀光を、獣染みた動体視力で軌道を読み、避ける。一閃、二閃、三閃！　避ける、避ける、避け、れない！？

気づけば民家の鉄柵に追い込まれていた。右側からは片腕をだらりと下げた黒マスク野郎が、逆手にダガーを構えて迫っている。

左は……思わず舌打ちが漏れた。電信柱とは運が尽きたか！？

なんて思考する前に両腕を万歳して全力で跳躍！　鉄柵の上部をガッチリ掴む。

そのまま両足を重直になるように柵に合わせ、全力で蹴り出し逆握りで逆上がり。

間一髪ッ、ガッキィンと鉄柵に刃が擦れる音が響く。

身体が真上よりやや後方に来たところで両手を離し、遠心力に導かれるまま鉄柵から数メートルの距離を稼ぐ。

取り敢えず殺陣から逃れた事に深い安堵の息を吐く。よく見れば

衣服はかなりズタボロで、刃物の鋭さが窺えた。
今更ながらに肝が冷えてくる、一般人（？）には荷の勝ちすぎた展開だ。

殺らなければ自分が“殺られる”、そんな空気と雰囲気。
相手の一挙手一投足、そのすべてに“迷い”が無い。
感情を一切窺わせないマスクに仮面、殺意なんてものは流石に分かりはしないものの、向けられている気迫は重厚で空気が質量を持ったかのようだ。
鉄柵は常人には中々厳しい高さを誇っているが、数分もしないでよじ登ってくるだろう。
どうするか？　そんなのは決まっている……！

「あーばよぉ、とっつぁ～ん！！」

全　力　で　逃　走　ッ！

元より正面から突破出来るなんて思っていないし、ましてや撃破なんて無駄無駄無駄！　もいいところである。
素人目から見ても相手は戦闘経験者。青年がまがりなりにも互角に立ち会えたのは、その人間離れした運動能力と、驚異的な動体視力の賜物であった。
体力と精神が尽きれば、待つのは無残な結果だろう。
ゆえに、戦略的撤退こそが最善。決して！　そう、決して逃げではないのがミソである。

かなり広い庭を真っ直ぐ突っ切り、反対側の鉄柵に跳躍一つ。

両手を縁に掛け、そのまま鉄柵を蹴り上げ先程と同じ要領でくるりとひとっとび。
民家の隣は別の家に繋がっており、柵を越えるか閉まった門を壊すかの二択しかない。
全力で走り、首筋の焦燥感が薄れたところで一休憩。

「あ〝あ〝あ〝あ〝……キツイ。何だよあのマスクと仮面野郎、何所から沸いて出てきたっつぅんだか」

電信柱に背を預け、ぜぇーはぁぜぇーはぁと酸素を求めて喘ぐ肺に空気を命一杯送ってやる。
数分で呼吸を落ち着け、ぎりぎりの逃走劇を逃げ切ったことにより、弛緩しかける精神に気合を入れる。
自分だから何とかなっているものの、それ以外の素人だったらとっくにテンプレを貫いて、転生だかなんだかをしていることだろう。
もっとも、この一連の異常事態が本当に巷で有名な神様がなんたら〜、という証拠などある筈もなく、また確かめる気もないのだが

――――

「あぁー、逃げられちまったよ。初めてじゃねぇーのかこれ？」
「まったくだ。一体どんな危機察知してやがるんだ、あの坊主？」

青年が休憩している一方。まんまと逃げられてしまった青年曰く、“マスクと仮面野郎”の両名は地面に座り込み、開いた口元を利用して煙草をふかしていた。
話題は先程逃げられてしまった青年について。
この二人。テンプレな小説で言い表すなら所謂“死神”というやつで、実はずっと昔から青年の魂を付け狙っていた者達であった。
十年前から事故に見せかけようと色々手を尽くしたのだが、どういう訳かそのすべて、尽くが失敗に終わってしまっているのだ。
それで遂には彼らの直属の上司、この世界を基点として発生している泡沫世界の集合体、“世界樹”に存在する全ての魂を管理統括している閻魔に、

『何時まで掛かっているんだボケぇ！』

と、お怒りを食らってしまい、仕方なく強行手段に出ることにしたのである。
しかし、結果は惨敗。彼ら死神は基本、その世界であり得る事故などを装って死を運ぶ。
ゆえに超常の異能はこの世界では使う訳にはいかなかったのだが……

「まぁ、完敗だわな」

マスク男がゆらゆらと器用にマスクの隙間から煙草を銜え、紫煙をくゆらせながらぼやく。

「姫さんの裁量で結界まで張ってもらったつぅのに。それでもこのザマだしな」

怪人というより、怪盗のような姿をした方がマスク男の答えを求めていない問い、それに律儀に答える。
身体能力を著しく制限していたとしても。それでも獲物を取り逃がしたのはここ数千年で初めてであった。
二人が停滞した夕日に染まった空を眺める。
逃げられたというのに、この余裕は如何なる理由か？

「まっ、やっこさんの運もここまでだわな」
「俺達の手で仕事を完遂できないってのは、まぁ目を瞑るべきか？」

ゆらゆらと紫煙が拡散して消えてゆく。
焦り？　そんな物は必要がない。
何故？　青年の向かった先には彼等二名とは別次元の“神”が居るからだ。
力の制限などされていない、いや、出来ない存在。
神の端くれたる二人から見れば天上人の如き存在、直属上司の閻魔ですら霞むお方。
ただ一つ。疑問があるとすれば――――

「なんで、あんな方がわざわざオリジナルの世界とは言え、一介の人間の魂狩りなんかにでしゃばって来たんだ？」
そう。そんな存在。姫と呼ばれる程のお方が何故、自分らの仕事なんかについてきたのか。
「さぁてねぇ。俺達なんかの知る由ことじゃぁねぇんだろうけどな

ぁ。ただ、これは噂なんだがよ。姫さんは俺等が誕生するより前から、ずっとずっと昔からとある魂を見守ってきたっちゅう話だわな」
「それがあの坊主だってのか？」
「さぁてな。噂はあくまで噂でしかありゃせんさな」

ゆらゆら、ゆらゆらと、煙草の紫煙が彼方へと運ばれていく。
自分達に殺されていれば、まだ理不尽な思いはしなかっただろうにと。
なまじ中途半端に生き足掻いてしまったがゆえに、触れてはいけないお方に向かってしまった。
それが運命なのか、偶然なのかはどうでもよいことだとマスク男は考える。
どちらにせよ、青年の末路は変わらないのだから、と――

参（後書き）

後書き

主人公が死んでくれないです。
なんかとっても足掻いてます。
予想外です。おかげで伸びてます展開ｗ
ここ数日、仕事の関係で全くこれなかったです、申し訳御座いません＾＾；

それでは感想評価・お気に入り登録に誤字脱字やアドバイスなど、
心よりお待ちしております！

肆

休憩中誰かが向かってくるような音も聞こえず、十分に体力の回復を図ることができた。
この静止世界はいつか解けるのか、あるいはずっとこのままなのかは不明だが、少なくともこのまま何もしないより、アクティブに動いた方が脱出の可能性はありそうだと、再度気合を注入した腰を持ち上げる。

「まっ、あの二人が追ってこないのは気になるけど……案じても始まらないしな」

だからといって道を戻るのは自殺行為。
二人が居た場所から逆方向に向かって歩き出す。
一体どれだけの距離が、この不可思議な世界に呑まれてしまったのか。
少なくとも視界に映る範囲の空は停止している。
いや、そもそもここは元居た世界なのか？
アニメやゲームで例えるなら、位相の違う世界だとか、封時結界の中だとか、そんな感じじゃないのだろうかと考える。

直感に近い感覚であったが、青年の最早馴染みの第六感的超感覚。
この不可思議な世界に訪れてから、富に鋭くなったソレ。その感覚がこの世界が封時結界に近いものだと囁いていた。
何故そんなことを？　というのは問題ではない。
この既知感にも似た、同じ事象を知っているような感覚。その感

覚が正しいのなら、やはり黙ったままではいけないのだ。
術者と呼んでいいのかは不明だけれども、この世界を構築した者を打倒するか、あるいはどれだけの距離かは分からないが、張られた結界をその強度以上の出力で破壊するか。
第三的な選択に術そのものに干渉する、という思考が思い浮かぶ。

だがしかし、それは無理だろうと直ぐに却下。
今取れる選択肢は一番の術者をどうにかすること。
究極的に助けが来ないとも言えないが、絶望的な数字なのは間違いなかった。
最も人より運動能力が優れている、という点を除いて人となんら変わらない青年に、こんな非常識なことを起こせる人物を探し出し、何とかするのは不可能に近いであろうが……

「ん？　今何か抜けたの……か？　て、え？　おいおいっ！？」

この事態をどうにか脱出しようと思考している途中、何かを通り抜けたような。
例えるなら生ぬるい液体の壁を通り抜ける、そんな感触を一瞬感じた。
不思議に思ったものの、まぁいいやと、視線を戻せば思わず口から驚愕の言葉が漏れる。
無理はない、誰が予想できようか？
直ぐ後ろには元の住宅街の景色が見えているというのに、前を向けば“宇宙”が広がっているなどと……
空間の広さを無視したような広大さ。煌く星々の光。平衡感覚が麻痺しそうな光景。それなのに足場はそのままなのか、一見何もな

いように見える足元は硬質な感覚を伝えてくる。

「はは……ははは っ。とうとう頭まで可笑しくなったのか？」

――その瞬間、ぞわりと肌を何かが駆け抜けた。

今まで、常人より多くの事故やトラブルを経験し、多くの人より少しばかりほどだが胆力に優れていると思っていた。

その自信がその一瞬で粉々に砕かれた、膝がガクリと崩れ落ちる。

この景色に圧倒された？　いいや、本能が感じ取ってしまったからだ。

居る、間違いなく居る。この先、そう遠くない先にこの世界を構築した“元凶”が、間違いなく居る。

それなのに、身体が前に進まない。脳は必死に“動け”と指令を下しているのに、魂とも呼べる部分が肉体を無視して既に“折れて”いた。

こひゅっと、喉が鳴る。そこで今まで呼吸することを忘れていたのだと理解した。

幸い酸素はあるのか、がむしゃらに呼吸を繰り返し、バクバクと高鳴る心臓を落ち着けるように酸素を取り込む。

それでも駄目だ……身体中からじっとりとした汗が滲む。

“何とか”なんて考えることすらおこがましい。およそ生物がどうにかできる“存在”ではない。

機嫌を損ねただけで、塵芥のように消されてしまう。

それが呼吸をするくらい当然に“出来てしまう”んだと、知りたくもないことを第六感的感覚が教えてくる。

「ぁ……ぐぅっ……ひぁ…」

逃げなくては！　逃げなくちゃ！　駄目だ、駄目だ、駄目だ。
警鐘はもう役に立たない、あまりの脅威に既に痛みなのかそうでないのか青年には理解できない。
一秒でも早くっ！　この場から逃げなくては、“消されてしまう前に”！
心臓が限界ギリギリまで鼓動し、涙と涎が絶え間なく流れ出る。
手が無様に宙を掻き、日常を映した境界線に伸ばされるが、伸ばしただけのそれは何度足掻こうと届きはしない。

「あっぁあ……ぅぁ」

必死に、這いずるように動く、それでも遠い。僅か一メートル程度の距離が、まるで世界一つを隔てているような、そんな気すら起こすくらい遠く感じる。
この感じる重圧感・存在感に比べれば、あの正体不明の二人の方が万倍以上もマシだ。
じんわりと、侵食するように湧き上がる“感情”。
知っている。知っている！　知っているッ！！
この感情。この感覚。人類の敵。すべての感情の終着点ッ！
誰もが必ず味わう感情。そう、これこそは――――

「本当はな、妄(わらわ)が来るはずではなかったのだ」

――絶望……
ぎりぎりっと首が後ろに曲がる。見てはいけないと、そう理解し

ているのに。
青年は振り返ってしまった。
その瞬間、青年の心は確かに何か暴力的な力によって染め上げられてしまった。黒の絶望色に……
喉から絶叫が迸る最中、それでも思う。駄目なんだ、ソレはいけない。

例え見た目が、十五〜十六歳程の少女で、引き摺る程長く艶やかな黒の髪をしていて、少し切れ長の瞳に長い睫毛、世界を呑み込むような黒色の終焉を模したかのような瞳。
小ぶりな鼻は愛らしく、真紅の唇は妖艶だとしても。
例えその身が裸体で、雪よりなお真っ白な雪花石膏（アラバスター）のような肌に、片手で包めそうな小ぶりで柔らかそうな乳房だとか。
細い肩。こちらに伸ばされた右腕に、細く長い優美な指先とか整えられた爪先だとか、なだらかな曲線を描き引き締まった腰にキュートなおへそ。
女性らしい丸みを帯びたヒップに、何も生えてない秘めやかな場所、見惚れる程の脚線美。
豊満ではないが、スレンダーな一種理想の体型。

まるで神が創りたもうた造形美。
人を優に超越した美しさ。美しいからこその存在（ソレ）なのか、存在（ソレ）だからこそ美しいのか。
だが、だが、だがッ！　そう、だがッ駄目なんだ！
これは駄目なんだ、どんなに美しくて、見惚れる容姿をしていても、この人の形をした“絶望”だけは駄目だッ！
容姿なんか問題じゃない、本能が食いつぶされ、青年が今も喉元から無様な嗚咽を繰り返すように。
“これは存在するだけで周囲に絶望を撒き散らす”、そういう存（モノ）

在なのだ。
あらゆる絶望が最後に行き着き、結果的に知能を有し、最終的に人の形をとった。
目の前の少女はそういう存在なのだ。

「……弱くなったな」
「な〝に〝……を〝」

これが普通の出会いなら思わず下半身がそそり立ちそうな、そんな艶やかな溜息を吐きながら目の前の絶望が語りかけてくる。
弱くなった、とはどういう意味なのか。そもそも、こんな馬鹿げた存在と交友を持った覚えなどない。
今もじわじわと侵食していく絶望に抗いながらも、疑問を全力で振り絞る。
ようやく出たのはまるで今際のさいの老人のような声だったが。

「前回のおぬしは妾を前にしてなお、一切の乱れを見せなかったというのに……」
「だがらっ！　なに〝を〝いっで！？」

必死に掠り出した言葉など無視するように少女は続ける。
しかし、青年には目の前の存在が何を言っているのか理解できない。
その全てを見透かしたような、漆黒の瞳に何を見ているというのか。
込み上げるイライラに、絶望一色に染め上げられた心のどこにそ

んな力が残っていたのか、依然として掠れた声だったけれど。
それでも先ほどより明瞭な言葉が吐いて出る。
その声に少女が幾分驚いたような表情を見せた。内心でザマーミロと口汚い言葉が浮かぶ。

「おぬしはやはりおぬしであるのだな……常人が妾を前に理性を保つのは不可能よ。例え保てても、そのように囀ることこそ無理であろうて。妾の今の心境が分かるか？」

まるで芝居のようだと思った。
くるりくるり、と片足を浮かせ、くるりくるりと回って踊る絶望の少女。
その姿、表情はまるで――
その思考の先に行き着く前に、既に言葉を発する程の力もないので仕方なく視線だけを飛ばしてやる。
どうやら自分は終わるらしいと、“絶望”してしまった心が判断していた。
ここまで必死に足掻いていたというのに、あっさりと。その少女の存在を感じた瞬間、硝子よりも容易く砕け散っていった足掻きの心。
だから、最後くらいその人に扮した絶望の戯言に耳を傾けてやるのも、まぁいいかな。なんて思ってしまった。
視線に気づいた少女が一瞬嬉しそうに、にっこりと笑う。
その表情に不覚にも心を揺り動かされそうになり、内心で俺もイカレちまったかと舌打ちする。

「嬉しいのだ。ようやっとだ。一京回目にしてようやく……ながか

った……とても長かったのだぞ？」

そう言ってその白く小さな手を、頬に差し伸べてくる。

今まさに、死の淵に立たせている者の仕草とは思えない程、その触れ方は慎重で、壊れ物を扱うように丁寧であった。

一撫でだけした後、そっと腕を引く。離れる一瞬、その指先が未練がましく宙を掻いたのを青年は見た。

「九千九百九十九兆九千九百九十九億九千九百九十九万九千九百九十九回、おぬしと妾が出会ってより前回まで、おぬしが潜った転生の門の回数よ。人以外の生も含めて一京回目の転生体。転生の門の浄化の炎ですら、その経験の全てを焼ききる事が出来なかった程の転生数。今はよい、何も理解できなくてよい……神の妾に時による消滅などないが、それでも長かった。ならば後暫く程の時間を待てぬ道理はない……何の因果か、前回のおぬしの願いは叶えてやれなくなってしもうたが……まさかこの世界樹の誕生一兆年目の祝い。そこで用意された籤で当たった人物に『もれなくチートな人生プレゼント♪』が、おぬしに当たるなど思うておらなんだ……」

はぁ……と片手を額に当て溜息を吐く自称神様。

というか既に説明も大分聞き取りにくくなってしまっているのだが。

確かにその存在感は、神様というカテゴリーに見合うものであった。

注釈として悪神と付きそうではあるが。

霞む意識で青年は思う。溜息を吐きたいのは俺だと――

「まぁ、本来ならおぬしは出会った二人に殺されて、目出度くお気に入りのアニメやゲームの世界へと転生。であったのだが、それはいけない。妾が許せない。不老不死なんてなられて、次の機会を逃すなど到底耐えられない。ゆえに、おぬしには残念ながら死んでもらう。今は眠れ。痛みを感じぬように殺してやるゆえ、眠るがよい」

既に意識半ばだった思考が急速に遠のいていく。

――俺は死ぬのか？　こんな所で？　理不尽に？

轟々と、どこから湧き出したのか、燃え盛るような感情が湧き上がる、そう、それは怒りだ。

魂が叫んでいる。許すなと、そんな理不尽は許容できないと。

このまま燃え盛れば絶望だって焼き尽くせるかもしれない。

と思ったが――

「妾の我侭で、妾の勝手で、妾の理不尽で……そなたを殺す。許してくれとは言わぬし、謝りもせぬ。恨みたければ恨んでくれて構わぬ」

――あぁ……折角の怒りが、業火のような怒りが和いでいく。

どうしてか？　仕方ないさ。そう仕方ない。目の前で謝らない、恨めと言っている少女がさ、例えそれが悪しきだろうと善しだろうと。

泣いてるんだ。綺麗な瞳なのに、美しい顔なのに。それをくちゃくちゃに歪めて。

ぼろぼろと、口調は傲慢なのに、その瞳からぼろぼろ、ぼろぼろと大粒の涙が零れ落ちるんだ、俺の顔にさ。

痛い、痛いって、聞こえるんだ。嘘を吐くのは痛いって、誰かの心が泣いてるのが聞こえるんだよ。
そんな娘相手にさ、誰が怒れるっていうんだ、怒鳴り散らせるって言うんだよ？

――ぁぁ……身体が冷えていくみたいだ。
いしきも、遠く…なってきた……
泣き虫だなぁ……泣くなよな、そんなに……
ほら、おれがぬぐってやるって……
ぁぁ……ちくしょう、手がうごかねぇ。
まったく、ふがいない腕だよ。

《ごめんなさい。ごめんなさい……ごめんなさい……》

――ぁぁ、だからなくなよ……
いもうとになかれてるみたいでいやなんだよ。
あれ？　いもうとなんていたっけおれ……
まぁ……いっか。

《ごめんなさい……ごめんなさい……》

――ぁぁ。わるい、もうだめっぽい。
くやしぃなぁ……ないたおんなのこのなみだすら、ぬぐってやれないなんて……
……くやしいなぁ……くやしい……な…ぁ……
…くや……しぃ……な……ぁ…

――意識が途切れる瞬間。

酷く、懐かしい名前で呼ばれた気がした。

肆（後書き）

後書き

更新が少々遅れましたが、その分、文章は多くしてありますのでお許し下さい。

ようやく現世編終了です。
物語上最終的に、主人公は相当強くなります。
今までの展開は、極一般人がそれは無理だろうということで、作者なりに考え用意した伏線や設定となります。

感想や評価、送って下さいますとやる気が増しますので、是非にともお願い致します。

伍

……

……？

どれだけの時間が経ったのか。

一分か、一時間か、一日か。それとも、もっと多大な時間が経過したのか。

死ぬ寸前、まるで抗い難い睡魔に委ねるように、眠りに落ちるかの如く意識が遮断された。

青年はその時確かに、自分は死んだのだと、そう漠然と感じたのだ。

しかし、蓋を開けて見れば何時の間にかボンヤリとだが、確実に意識とも呼べる何かを感じている自分に気がついてから幾星霜。

比喩であるが、時間の感覚を失っている状態でかつ、主観でそう感じたのだからあながち間違いでもないだろう。

それは複雑な思考をするまでには至らず、まるで起きぬけの半覚醒状態のように、時間の感覚すら曖昧だ。

死んだ筈なのだ。それならここは死後の世界なのか。

感覚もなく、ただぼんやりとした思考だけしかできないこれが死後の世界だと。

それは何と恐ろしくおぞましいのか。肉体があれば、思わず叫びだしていたに違いない。

そこでふと気づく、自分が随分と複雑な思考を繰り返している事実に。

どれくらいの時間を掛けてここまで至ったのか。あるいは回復したと呼ぶべきか、兎に角この状況に至ったのかは分からない。

それでも常のような思考が出来るというのは、恐怖であり救いであった。
半覚醒であればまだこの暗闇の世界で、思考だけしかできず、他の一切をおこなえない恐怖に耐えられただろう。
だがそれは停滞であり、そこに存在しているとは言い難い。
今のように確固足る自我を獲得してこそ意味はあるのだと、それが青年の生まれて物心ついた時からの持論であった。
今にして思えばそれはもしかしたら、あの知らない知識などと同じような理屈だったのかもしれない。

こうして複雑な思考が出来るようになったのは、誇張抜きにしても素直に喜ぶべきことであった。
が、反面。それはこの何時まで続くとも知れぬ思考だけの世界、この感覚もない暗闇の世界で、発狂するまで孤独に耐え続けなければいけないということである。
それは正しく地獄とも呼べる責め苦だ。むしろ此処こそが地獄なのか？　そうじゃないとしても、到底耐えられる筈がない。
希望は絶望の苗床であると言う。成る程、と青年は思った。
自分は今でこそあの絶望の少女を恨んではいないが、それでもその存在が絶望の具現であることに変わりはない。
それはつまり、今の状況こそが少女の少女足らしめるその絶望による力なのではないか？
と、思考しかやることもないので、色々と仮説を立ててみるのだが、今一釈然としなかった。

仕方なく今度は何故少女が泣いていたのか、その事について青年

は思考してみることにした。
どうやらあの少女。いや、神様は青年を知っているらしかった。
ただそれは“今の青年”ではなく、数えるのも馬鹿らしくなるくらい転生？　とやらを繰り返してきた過去の青年を知っている、ということらしい。
つまり、今まで不思議に思っていた感覚や知識などは、その青年じゃない転生以前からの経験によるものだったのだろうと、ここに至ってようやく思い至る。

それは少女が浄化の炎という言葉を用いていたことから、恐らく間違いはないだろう。
そしてこうも言っていた。確か、自分で一京目の転生だ、と。
想像すら及ばない数字であった。一京、兆の一つ上の桁である。どうやら人等の知的生命体以外も含まれているらしかったが、それでも法外も法外。
一般的と呼べばいいのか不明だが、魂が普通どれだけ歴史を重ねてるのか分からない為比較のしようもないのだが、それでも恐らく非常識な数値であるに違いない。

そこで何故転生の回数を知っているのかと疑問に思う。
神様特権でもあるのか、そうでないのならその転生を見届けでもしない限り無理である。
一京回も？　と考えたところで感覚もなく、肉体すらない筈なのに、背筋が凍えるような思いを感じた。
神とはそれほど気が長いのか？　青年の常識で当て嵌めればそれは最早妄執、あるいは狂気の沙汰とも呼ぶべきもの違いない。
一京。一回の生が一年なら一京年。惑星の寿命すら優に超越する時間である。

むしろその生の回数で星の生命数を凌ぐかもしれない。

無い頭を振るように思考を追い払う。

嘘か真は兎も角、己がそれだけの回数、転生してきたという自覚は無論無い為、この思考は意味がなかった。

思考も脱線してしまっていることに気づき、改めて少女の事を考える。

仮に少女が一京回の転生を見守ってきたとしたら、理由はなんであろうか？

何かの約束？　恨み？　それとも――愛？

どれも違うようでしかし、正しいようにも思える矛盾。

その後も様々なことに思考えお巡らしたが、結局分かったのは少女が青年の遥か昔の転生体に、何かしらの興味を持ち、ずっと見守ってきたのであろうということ。

そしてどうやら前回の自分は相当に滅茶苦茶であり、かなりの実力者であったらしいということ。

何故なら少女の台詞がそれを暗に示していたからだ。

つまり、情報が整理されただけで何一つ分かりはしなかったということであった――

ふと。思考だけの存在に成り果てた筈なのに、奇妙な疲れを感じていることに気づく。

まるで……そう、あの少女によって死の眠りへと誘われたときと同じような。

既に死んだ身だと、抵抗することもなくその衝動に身を委ねた――

――――

「めよ……！　…ぬ…か！」

誰かが呼ぶ声が聞こえた。
どこか遠く、不透明なそれは覚醒と深淵の狭間でまどろんでいた意識を刺激する。

「……きよ！　え…し！」

再び声が届く。
その声に反応してか、少しずつ意識が鮮明になる。
理由は不明だが、起きなくてはいけないという、何か強迫観念にも似た衝動が沸きあがっていた。
しかし、意識はまるで丈夫な鎖で雁字搦めにされたかのようにハッキリしない。
今すぐ覚醒したいというのに、この穏やかな眠りもまた心地がよいのだと、相反した思いが巡る。

「起き…よ！　わらわ……待たせる…ない！」

声が段々とハッキリしてくる。
それはどうやら女性、というにはもう少し若く高い音階。少女と呼ぶに相応しく、耳に心地の良い調べだ。

はて、と。青年は疑問に思う。この声に覚えがある、と。
つい最近、いや、遥か昔。駄目だ、時間の感覚が麻痺してしまい、時の流れを把握できない。
それでも恐らく異性の中では最も最近に、この声を聞いたような、と青年が考えて――

「ええいっ！　いい加減起きぬかエニシ！」
「ふへぃっ！？」

直ぐ側から響いた暴力的なまでの声量に思わず、跳ね起きるように立ち上がる。
まるで長いこと身体を使ってなかったかのように、よろりとよろめいてしまう。
そこで思考がようやく追いついた。

「肉体……だって…？」

あり得ざる現象、自分は死んだ筈なのだから、と。まるで狐に化かされたかのような心境であった。
思わず片手で頬を抓ってしまう。すると鈍い痛みが広がった。
つまり、感覚がある。地面を踏みしめる感触がある。
何よりあの暗闇の空間ではなく、景色がある！

「ははっ、ははは、ははははは！　生きてる、生きてるぞッ！！」

両手を翳す、そうすればちゃんとした生身の肉体で構成された手

が、腕が！
様々な景色が瞳から網膜を介して脳に映像として伝達される！
五感全てがある。匂いが嗅げる、物を感触を確かめられる、呼吸が出来る。
知らなかったのだ。生きているということが、何かをするということが、出来るということが、これ程までに素晴らしいものなんだと。
まるで自分じゃないかのように、騒ぎはしゃぎ、命一杯に今を感じる！

理由は不明だが、何故か衣服が変わってしまっている、が気にせずに地面に転がり回る。
何処かの草原なのか、自然豊かな原っぱは青々とした風景を視覚と脳にこれでもか、とうったえてくる。
それがまた嬉しく、より一層激しく転がり回れば草や土が顔に付き、乾いた土の匂いが鼻腔一杯に広がる。それが更に嬉しい。
あの暗闇では何も感じれなかったのだ、どんな些細なことでも今は素晴らしい！

「むっ。エニシは毎回嬉しそうな反応をするな。もっとも妾には逆に辛いのだが、の……」

そこでようやく青年が別にもう一人、それも自分を現状に状態にしてくれたであろう、そうでなくとも起こしてくれた筈の女性が居ることを思い出した。
更には何故か名前まで知られているらしく、取り敢えず常ならざる失態に謝ろうとして。

振り返ったのと同時、少女の口元が動く。

「――――――だ」

――イマナニヲイッタノカ？

脳がその事を認めるのを拒否したのか、少女の。

いや、何故此処に居るのかは不明であったが絶望の少女、自称神様から告げられた言葉が、まるでモザイクでも掛かったかのように聞き取ることが出来ない。

「もう一度言おう」

やめろ、ヤメロ！

聞きたくない。聞きたくない！

「エニシ、そなたは――」

あの圧倒的な気配がしない。

それなら、と。その口を塞いで飛び出るだろう言葉を防ぎたいのに、身体は硬直し、指一本動いてくれない。

少女の口が開く、言い聞かせるように、ゆっくりと、艶やかな舌に音を乗せて――

「死んでおるのだ」

――絶望の言葉を吐いた。

「ハハッ、だって、ほら！　手だって足だって感覚だってあるんだ

ぜ？　それなのに……それなのに、俺が……俺が死んでいるだって？　じゃあこの身体は何だって言うんだ！？　血の通った肉体だぞ！？」

まるで掴み掛からんばかりの勢いで詰め寄り、その端整な顔に唾を吐き散らすかの如き勢いで一気に捲くし立てる。

答えは、ない。

無言であった。少女は喋らない、語らない。

青年の苛立ちが高まり、思わず掴みかかろうとして――

少女の顔が泣きそうに歪んでいることに気づいてしまった。

ああ、まただ、と思った。

死ぬ間際にも見た表情であったそれは、酷く心をざわめかせる。

見てて痛々しくなる。

「わりぃ……」

その一言が精一杯だった。

普通なら自分を殺した張本人だ、もっと怒鳴り散らすなりなんなりするのが正しいのかもしれない。

しかし、それは問題の後回しに過ぎないのだ。

少女は言っていたではないか。変な籤に当たったのだ、と。つまり、少女が殺さずとも結局は死んでいたのだ。　それは遅いか早いかの違いでしかない。

「すまぬ……そなたには毎回慰められるな」

そう言って全裸の少女は腕でごしごしと目元を擦る。
終わった後に残ったのは真っ白な肌の影響か、赤く腫れてしまった目元だけであった。
それが余計に青年の心をざわつかせる。
気を抜けば抱きしめていたかもしれない。

「これからそなたのこと、そして現状について話すゆえ、聞く気があるのならば座るが良い」

そう言って何時の間に出現したのか、青年の隣にぽつんと存在を主張する木製の椅子を示す。
真剣な表情の少女に釣られ、青年もまた気を引き締めるとそれに黙って座り、目線だけで少女に意思を伝える。　そう、青年にはそれを聞く権利があり、少女には話す義務があるのだから――――

伍（後書き）

後書き

今回は予定と大幅に違う内容で書き始めてしまい、お陰で色々ガタガタになってしまいました^^；

広い心で見詰めて下さると嬉しく思いますw

迷宮編、というか本編？　までもう数話だけクッションとして挿むのでお待ち下さいませ。

陸（前書き）

時間が空いて申し訳御座いません。
メイン小説を誤って削除したり、と。
ハプニング等がありまして。

陸

「結局、眠れなかった……」

少女から様々な話しを聞いた後、連れられて来た場所がここ、“タルタロス”と言う第一区画の死後の迷宮世界、その一番安い宿屋だ。

ここは泊まるだけなら料金が発生しないという。

食事は出ない。風呂もない。簡素なベッドと箪笥が一つ置いてあるのみ。

血の通ったと思っていた肉体はアストラル体と呼ばれる、言わば魂だけの状態であり、排泄の必要もなければ通常、腹が空く事も無いと言う。

つまり、ただ無為に時を過ごすだけならここで十分だと言えた。

何故エニシがここに連れてこられたのか。理由は単純明快、それは死んだからだ。

死んだ魂はその連なる世界樹、少女が言うにはあらゆる世界の集合体であり、“外”から見れば樹木の形をしていて、そこからそう呼ばれるようになったらしい。

その世界樹毎に定められた番号で、タルタロスの対象区画に集められる。

因みにタルタロスに来れるのは人型になれる“魂”だけだ。

それ以外の魂は転生までの百年を封印状態で待つことになる。

このタルタロスと呼ばれる世界は“遊技場”だ、神と呼ばれる存(も)(の)

在達が運営する遊技場。
神と言ったが、それは正確には上位存在、高次元的存在と言い換えるのが正しい。
世界の理にすら干渉し、あらゆる事象を超越した者達を総称してそう呼ぶ。
その大半が不老不死である為、遥か那由他(なゆた)の先まで生きるその者達はある時、暇つぶしにとある小さな世界を構築した。

それがタルタロスの始まりであり、現行のタルタロスはそれが肥大化した物だ。
タルタロスには一つの大迷宮が存在している。
それこそがこの遊技場の目玉、本命であり、最下層は何処までなのかは誰も知らないと言う。
分かっている事と言えば、その迷宮での活躍により、“様々な特典”が得られるという事。
それこそエニシの世界のネット小説にある、“記憶保持の転生”や“チート能力所持”だといった事すら容易である。

転生までの百年間で迷宮の魔物や財宝、そしてどれだけ深部に到達出来るかで“得点”が加算され、それを消費することで願いとの対価とするのだ。
少女から聞いた他のシステムを聞き、絶対ＲＰＧ参照しているだろう。
とエニシが聞けば、逆だという。エニシの世界がタルタロスを無意識下領域より流れ出でた情報により、タルタロスの一端を垣間見、それを元にしてＲＰＧは生まれたのだ、と。
そうして生まれた“世界”は泡沫世界となり、時に苗となり新たな世界樹を生成するのだと言う。

そしてそう言う“世界を生み出した世界樹の元”、その世界をオリジンズワールド。通称オリジンの世界と呼ぶ、ということも。
エニシの世界がそれに当たり、その世界は生み出した世界より上位に位置し、下位の世界は更なる下を作り出す。
そうして世界は常にピラミッド型の螺旋を描くように深層を増していく。
こう言った知識の殆どが少女により“思い出した”内容であった。

聞けば転生迷宮に来るのは初めてなどではなく、それこそ数えるのも馬鹿らしくなる程訪れ、そして幾度も願いを勝ち取っていったと言う。
前回の願いが“理不尽に抗う程度”の肉体的能力と、危機察知能力。
功績からすれば随分微々たる願いであったらしく、それ以前もすべてが似たり寄ったりで欲がないと少女は言っていた。

それを聞き、尋常ならざる身体能力と、不可思議な警鐘に納得がいったとエニシは頷いた。
他にも様々な事を思い出したり、聞いたりしたが、整理には時間が掛かるだろうし、何より死神に邪魔されたくなかったというその理由などは話されていない。

「この世界にも太陽はあるのか」

何をするにしても部屋で腐っていても仕方がない、と宿屋の自室

のある二階から降り、主人に外出の趣旨を伝え外に出れば元の世界となんら変わらない日の光。
快晴、眩しさに思わず手を翳し日を遮ってしまう。

《何をしておる、時間は有限であるのだぞ？》
《分かってるよっ――――》

直接頭に響く声、このタルタロスで神は一人だけ気に入った魂（もの）を祝福出来る。
その恩恵は多岐に渡るのだが、すでに様々な情報を一気に叩き込まれた為、その説明は今度ということで受けていなかった。
声の主はあの少女だ、祝福した神はこうして祝福した相手に干渉することが出来る。
と、そう言えば未だこの少女の名前を知らない事に今更ながらに気づく。

《む、どうした？》

不自然に言葉に詰まってしまった為か、やや不安気な声が脳裏に響いた。

《えっと、さ。確か聞いてなかったよな、君の名前》
《ああ、そう言えば約束であったな、ならば教えぬ訳にはいくまいて……そうよな、エニシにも発音出来るようにすれば……Ｖｅｒｚｗｅｉｆｌｕｎｇ（フェアツヴァイフルング）となるであろうか？》

フェアツヴァイフルング……どういう意味なのかは分からない。
しかし、名前にしては長く、呼び難い。
それでは呼ぶときとか不便だと、幾つか縮めるのに候補を思考に挙げていく。
幾つか考え、一番よさそうなものを何度か発音し確かめる。

《フェル、うん。良かったらだけどさ、これからはフェルって呼んで良いだろうか？》
《……フェル、フェル――そうよな、妾はそれで構わぬ》

暫くの逡巡の後、少しだけ嬉しそうな声音で了承の意が返ってくる。
こうやって話して分かったことがあった。
それはこのフェルという少女、神様だから年は相当なものなのだろうけど。
自分に対しては少なくとも好意的であるらしく、その好意の種類までは不明でも分かる。
あの不思議な空間での振舞いの方がどうやら無理をしていた、ということが。

本来、というべきなのかはエニシには不明であったが、フェルの性格は上目線な物言いながらもどこか純真だ。
長い年月を生きているとは思えない発言、反応を返してくることが何度かあったのが良い証拠だろう。

《ほれ、何をぼぉーとしておる。せっかくエニシには支度用のポイ

ントを渡してやったのだ、取り敢えずは広場の武器屋に行くのがよかろうて》
《了解》

ポイント。迷宮の行動如何で貰えるものであり、デジタル方式で表示され溜まるらしい。
しかも、このタルタロスでは一切の取引全てがこのポイントで賄われるという話しだ。
無駄遣いをすればその分目標は遠ざかる、しかし、人の欲望は限りが無い。嫌らしい仕組みであった。
フェルに急かされるように宿屋を後にする。
このタルタロスの第一区画の大きさは優にオーストラリアレベルだ。

その土地の全てが巨大都市として機能しており、円形の形で存在している。
あまりにも広い為、各所には空間歪曲用ポータルが設置されていて、様々な場所へと繋がっているとのこと。
町並みは古き良き古都と言った風情で、全体的に見る限りこの一区は地球に類似した世界を参照されているようだ。

和洋の混ざった景観で、一定の距離ごとに切り替わるように町並みが変わる。
和であれば古き良き昭和、或いは明治時代を彷彿とさせ、洋ならば近代ヨーロッパや中世の町並み。
とある神様の趣味、だそうだ。
宿屋は丁度広場の一角にあり、半径五十メートル程度の広場になっている。

この当たりは近代ヨーロッパ風らしく、家作りも煉瓦が多い。
中心には噴水が水を噴き上げ、時折飛沫が顔に掛かってほんのり冷たく心地がよい。

気候は四季を再現されているらしく、フェル曰く現在は六月。
気温は二十六℃と、中々に暖かなものである。
宿屋“シュピーゲル”の向かい側に見える、防具を模した絵の上で二本の剣の絵が交差した看板。
その木製のドアを開けば、チリリン――
と、鈴の音が鳴った。

「すいませーん」

取り敢えず入り様に声を掛けるが反応はなく、仕方なしに武器や防具が立ち並ぶ商品棚の奥、店主が居るだろうカウンターまで向かう。
それほど広くはなく、縦三列に横二列と見渡せるレベル。
ちょっと進んだ先に見えたカウンターには誰も居らず、さてどうしたものかと頭を悩ます。

《店主が店を開けて出るのはそう多くはなかろうて、然程(さほど)時間も掛からず戻ろう、適当に商品でも見ておるのがよいぞ》

成るほどと納得し、改めて商品棚を眺める。
そこにはエニシが見たことある物、ない物含めて様々な物が溢れ

ていた。
片手剣一つとっても様々な物がある、ショートソードやロングソードにブロードソードなどから始まり、グラディウスやフランヴェルクにクレイモア、ファルシオンにサーベルやパタまで置いてある。
細剣ならエストックやエペ、レイピアやフルーレが一箇所に置いてあった。

両手用ならツーハンデッドソードやグレイトソード、バスタードソードやツヴァイヘンダー。
短剣の類も充実しているようでざっと見ただけで、マインゴーシュやスティレット、一般的なダガーにソードブレイカーやククリまで。
槍も長槍や短槍に十字槍、他にも多数が並んでいる。
盾にしたって様々な種類が並び、鎧の類も充実しているのが見て取れた。
フェル曰くこれで“初心者”用だと言うのだから、とんでもない話しである。

と、色々みていると先ほどエニシ自身が鳴らした鈴の音が鳴る。
振り向くのと同時――

「ほぉ、この店に来たってことは、兄ちゃんタルタロスに来たばかりかい？」

と訪ねられ、答えるべきかと少しだけ考え。

「はい、実は昨日から来たばっかりで、取り敢えず武器屋に行けってフェルが。フェルって言うのはどうやら祝福？　てのをしてくれ

てる神様なんですけど」
「兄ちゃん祝福者かい、そりゃぁ心強いだろうぜ？　ここじゃあ贔屓は当たり前、運も実力、特に神の祝福なんてのはその最たるものだという訳よ」

そう言ってガハガハと笑う、何処からどう見ても架空の種族“ドワーフ”に似た外見の店主だと思われる年配の人物。
肌は褐色だし、ガッシリとした体は百五十センチもないだろう。
反して腕は太く逞しい、顎鬚は立派で瞳は大きく性格が豪快そうだ。
絵に描いたかのような見た目、それが受けた印象だった。

「ちょっと通してもらうぜ」

カウンターの奥に移動したの見るに、どうやら本当に店主らしい。

「さってと。武器の扱いは初めてかい兄ちゃん？」
「はい。ただ……多分、時間さえあればどれも使えると思います」
「こりゃ驚いたな、兄ちゃん経験持ちなのか」
「経験、持ち？」

聞きなれない単語に思わず、と言った感じに聞き返してしまう。

「此処に居る奴は殆ど全員がアストラル体で構成されている。わしもそこは変わらん、しかし、アストラル。つまりは魂だけで構築されている分、潜在的な能力や前世、魂に保存された情報を引き出しやすくなってるちゅう話しよ。中には生きている時から前世の記憶を保持してたり、経験を覚えてる輩もおるそうだが、迷宮で功績を成

した者でもない限りは先ず居ないだろうよ。話しがずれたが、そういうの全部ひっくるめて経験持ちってタルタロスでは呼ばれとる」

――その後、店主から他にも迷宮などの話しを聞き、結局バックラーと呼ばれる腕に装着できるタイプの盾と、無難にブロードソードを一本購入。

というより、手持ちのポイントじゃそれが精一杯だったのだ。腕時計型のポイント表示用のアイテムには零に程近い数字が浮かんでいる。

武器の扱いに慣れない内は素手の方がマシ、と聞くものの、心理的にはやはり心強い。

それに身体能力はどうやら生きてた時のものが反映されるらしく、盾とあわせても精々が二キロ少し、十分に扱える重さであった。

《何だか楽しそうであるな？》

鼻歌交じりに次は何処へ向かおうか、と広場で考えていると、フェルが不思議そうに訊ねてきた。

それに対して答えるべきか一瞬だけ迷ったものの、隠しても仕方がないと口を開く。

《いや、さ。不思議と生前？　どうも現実と変わらないから死んだって気持ちが薄いけど。とにかく、その時から迷宮とかってものには強く惹かれる傾向があったんだ。さっきまではそうでもなかったんだけどな、店主から話しを聞いたり、こうして実際に武器を手に取るとさ、興奮してくるって言ったらいいのか分からないが、だんだんと高揚して来たんだ》

これも前世とかの影響なのかもな、と最後に付け足す。

《前回の時も似た反応であったからの、そなたの魂の起源に由来するのやもしれぬ。さて、武器も買ったのだ、細かい話しや説明は後でよかろう。先ずは実践が一番よ、次の目的地は……》

《目的地は？》

《迷宮じゃ！》

了解ッ！　とエニシが叫び、身に湧き上がる興奮のままにポータルへと走り出す。

心は軽く、身体は勇み足だ。倫理観は麻痺でもしているのか恐怖はない。

あるのはこれから訪れるだろう、数々の冒険の日々に対する思いのみ――――

陸（後書き）

後書き

ちょっと無理やりですが、話しを飛ばしました。
された筈の会話はちょくちょく回想的な内容で小出しにします。

お陰で予想より早めに迷宮に吶喊出来そうです。
次回は恐らく初、迷宮突入となるでしょう。

それでは次はもう少し早めに更新したいと思います＾＾；

染

《因みに迷宮の階層は妄(わらわ)も詳しいことは知らぬ。前回のお主で確か二十七層までだった筈じゃ。取り敢えずそのオーブに触れてみよ》

それに頷き改めてポータルと言うらしいソレに相対する。

と言っても何かＳＦチックな機械が置いてる訳ではなく、幾何学的な文様が半径一メートル程度で描かれた床、その真上に薄青色に輝くバスケットボール程の光球が浮いているだけであった。

言われたとおりに軽く手を伸ばし触れてみる。

「へ？」

思わずマヌケな声が出てしまう。

オーブに触れるのと同時、眼前に縦二十センチ、横六十センチ程の厚さのないウィンドウが突如現れた。

景色が薄ぼんやりと透ける半透明で、まるで立体ホログラフのようで、ＳＦじゃないと思った端から出鼻を挫かれる。

現代技術じゃ到底不可能であろう技術の登場に、好奇心が刺激され穴が空くほど見つめれば、高速で文字が流れはじめ、暫くすると停止した。

《ん？　これ、日本語なのか？》

《いや、触れた物の母国語が自動で表示されるようになっておる。その画面に地区移動、都市内移動の他に迷宮移動という項目があろ

う？　そこに触れてみよ》

確かに仮想ウィンドウの中の一項目には“迷宮への移動”と、銘打たれた文字列があった。

恐る恐ると言った感じで人差し指で触れれば、思ったより硬質な感触を肌に伝え、画面が切り替わる。

表示された画面には迷宮第一層とだけ、簡素に表示されていて他には他の項目メニューだけで何もない。

《そのオーブに触れると一緒に情報が登録されるでな、今現在行ける場所の階層が表示される仕組みになっておる》

《深層に行くのに条件でもあるのか？》

《うむ、単純だぞ。レベルが上がれば自動で開放される仕組みとなっておる。他に能力値がレベルより高く、次の階層へのレベルと遜色がなければ、それでも開放されるようになっておるようじゃ。第一層は確か草原であった筈、百聞より一見、その一層と出ている部分を押してみるがよい》

迷宮、幼い時よりなぜか心惹かれた単語。

それが今、目の前で口を開けて待っている。フェルの言葉によって、自分がその入り口に立っているのだと更に強く実感する。

緊張とは違うドキドキ感が身を包み、武者震いでもするかのよう腕が震えてしまう。

深呼吸を一つ。僅かながらに落ち着いた震えを確認し、一層と書かれたウィンドウにそっと指を触れ――――

――――眩しい白光が目を焼いた、と思った瞬間。気づけば大草原に一人ぽつんと立っていた。
見渡す限りの草原、サバンナとでも言うべきか。ぽつんぽつんと生えている背の低い木と、点のように見えるあちらこちらに確認できる何かの生き物。
青い空、気温は夏の終わり頃くらいだろうか。その環境は地球とそう変わらないように感じる。
というより、広かった。地平線まで見えるとは、一体どれだけ広大なのか？

「此処が迷宮……」
《うむ。迷宮一階層じゃな。広さは大よそ三千キロメートルであろうか？　丁度地球の十分の一よりやや小さいといったところであるな》

思わず口に出してしまった言葉に、律儀にフェルが答えてくれる。
その言葉にはどこか誇らしげな雰囲気が漂い、腰に手を当てふんぞり返っている姿まで幻視出来そうであった。
なんて格好のフェルを妄想するという逃避を止め、後半に聞こえた事実に改めて呆然となってしまう。
地球と、そう言ったのだ。その地球の十分の一の広さだ、と。思わずもう一度周囲を見渡す。
迷宮というからどこかの遺跡だとか、洞窟なのかと思っていたのだ。
まさか“太陽”まである世界一個を、丸々用意さているなんて思

いもしなかった。

《まぁ、此処と同じような世界は無数にあるのだがの。一つで足りる道理などないゆえな》

確かにと頷く。タルタロスに来れる魂がどれだけの割合なのか知る由もないことであろうが、それでもその数は無量大数の彼岸に手が届く程であろうことは明白だ。

ここに来る前にフェルから聞きかじった話しでは、それこそ世界の数なんて無限の彼方へと王手を差し込んでいるというのだ。

エニシにすれば馬鹿でかい感覚のこの世界も、実際には小さすぎると言って過言ではないのかもしれない。

《さて、呆けておっても始まらぬ、一層の魔物は一般人ですら相手どれるうえ、近くには丁度いないようであるな。取り敢えず、タルタロに来る時に渡した『ステータスカード』を出すがよい》

《これか？》

タルタロスに入るのと同時に、フェルが渡した一枚のカード。

エニシの世界のＩＤカードに近いようだが、材質はなんなのかさっぱりであった。

実は密かに折れるか試したのだが、名刺よりやや大きい程度、薄さも同じくらいの癖して曲がりもしなかったのである。

尋常じゃない強度であるのは間違いないだろう。

《うむ、それは文字通りに所持者のステータスを示すものでな、そのカードを手に持った状態で頭の中でセットアップ・ステータスと呟いてみみよ》

言われたとおりにカードを手に持ち、瞳を閉じて言葉を思い浮かべる。

強く、というのが今一理解できなかったが、叫べばいいのか？

と、取り敢えず感嘆符が付きそうな勢いで脳内で叫んでみる。実はちょっと特撮系のノリは好きな方であった。

するとカードが一瞬白色に輝き、その表面に文字が浮かぶ。

《登録名》

＝「エニシ」

《レベル》

＝「一」

《保有スキル》

『魂蔵』『経験喚起』『絶望神の祝福』『戦闘センス（ＳＳ）』『魔道センス（Ｓ＋）』

『身体能力増加（Ｅ－）』『筋力増加（Ｅ－）』『魔力増加（Ｆ＋）』

《能力値》

『身体（Ｅ）』『魔力（Ｅ－）』『戦闘技術（Ｆ－）』『魔道技術（Ｆ－）』

表面に名前やレベル、能力値が書かれ、裏側にスキル一覧とやらが表示されている。

《ほぉ、流石だのぉ。前回の時よりセンス系はすべてワンランク・

ツーランク程上がっておるわ、殆ど最高ランクではないか》

何処からかでも見ているのか、カードに浮かび上がったスキル覧を覗き込んだような反応でフェルが感嘆の声を漏らした。

と言ってもエニシには何が何やらさっぱりであるのだが。

《俺には見てもサッパリ訳が分からんぞ、説明してくれ》

《ふむ、毎度説明し直すのは面倒なんだがのぉ……》

と、言いつつも声音には嫌がる雰囲気はなく、どこか嬉しそうな気配がするのは間違いないだろう。

こほん、と可愛らしくもわざとらしい空咳が聞こえたかと思うと順に説明してくれる。

《さて、まずはレベルだが、これはそのまんまの意味よな。エニシの世界にあるゲームとやらにもあろう？　敵を倒すと経験値が増え、それが溜まるとレベルが上がって強くなるとな。この死後（タルタロス）の迷宮世界でも同じ事が言えての、敵を倒せばその生体エネルギーとも呼ぶべきものが蓄積（プール）されて、それが一定値まで溜まるのと同時にアストラル体が吸収、レベルアップという訳じゃな。この時に一緒に身体能力や魔力量なんかも上昇するのじゃが、その上昇量は魂の質と言うべきか、あるいは格とも呼ばれるもので差が出るから注意じゃの》

そこまで一気に話したフェルは一息入れ、こちらに分かるか？と聞いてきたので、エニシは問題ないと念話で伝える。

アストラル体は肉体の劣化に縛られない為、純粋な記憶能力は比べ物にならない程に高い。

思い出すことに関しても同様のことが言えた。

つまり、同じレベルでも能力に差は出る、ということだろう。

《さて、このレベルアップ時には既存のスキルのランクアップの可能性と、新規スキルの所得の可能性がある。両方とも取得には運と条件があっての》

《条件？》

てっきり自動で覚えたり、全部ランダムだと思っていたばかりに思わず間抜けな顔で返してしまう。

それに気づかなかったのか、はたまた気にしないのか、軽く首肯するような気配が伝わってくる。

《うむ、先ずスキルには幾つか種類があっての、一つは魂の記憶じゃ。これは魂が過去保存してきた記憶と経験が生体エネルギーの増加を鍵に思い出す現象じゃな。魂の起源が古く転生回数が多いほどチャンスは増えることになろう。次に条件スキルとも、称号スキルとも呼ばれるものでの、一定の行動や条件によって得られる称号で、有名な物では『竜殺し』や『神殺し』が挙げられるかの？　神殺しに関しては迷宮に存在する偽神だがの》

と、最後に詰まらなさそうに話す。

確かに字のままならつまり、フェル程ではないにしろ、あの死神連中は殺せるだけの能力は必要ということになってしまう。

《なるほど、何か特別なことをした場合に得られるって解釈でいいのか？》

《概ねその通りで構わぬであろうよ》
《んじゃ、最後のって？》
《ふふん、よかろう、話してしんぜようぞ》

ようは前者が固有スキルを含むものであったりする場合が多く、覚えられる人と覚えられない人がいるのだろう。
後者は逆に情報と条件さえクリアできれば誰でも覚えられる、ということになる。
この二つ以外になると予想が付かないので、訊ねてみれば、よくぞ聞いてくれた！　的な雰囲気がエニシにひしひしと伝わってきた。
さっき、何度も説明するのは飽いたと言っていた人物とは思えない豹変ぶりである。

《最後のスキルは言わば最初から取得しているスキルの類を指す、ある意味条件スキルに近いやも知れぬな》
《あれ？　んじゃ、俺の覚えてたスキルって全部それになるんじゃないのか？》

《いや、エニシの場合はまた特殊な部類に入っての。魂蔵（たまぐら）というスキルがあったであろう？　あれは迷宮で一定の深さ以上を踏破してかつ、無事に願いを叶えた者に与えられるスキルでの。効果は一部スキルの継承と、スキルの喚起率上昇となる。その次の経験喚起は魂の起源が一定上の歴史を持つ者かつ、魂が過去の経験を喚起出来るだけの強度がある場合に所持出来るスキルでな、効果は物事すべての行動に関して、過去経験があればその成長速度を加速させたり、思い出したりするものじゃな。三つ目は妾（わらわ）の祝福によるスキルとなる、他はすべて魂蔵による継承スキルであろう》

一気に蓄積された知識をゆっくり咀嚼していく。
幸い思い出したり記憶する分には困らないし、ＲＰＧ要素に限りなく近い為、飲み込むのは容易そうである。
その手のゲームをエニシは相当数やり込んでいるのだから。

《んじゃ、この能力とかにあるアルファベットは？》
《それは能力の高さでの、スキルにもあろう？　スキルに付いている場合は同じスキルでも、その効力の高さで分けられたりするのだ。因みに増加系は成長するからの、今はランクが低くても後半には相当なものになろう。ランクは基本ＦＥＤＣＢＡＳ更にダブルＳ、トリプルＳの九段で分かれ、そこに更に＋と－が付与されることとなっておる。これにはスキルでの加増も含まれるゆえ注意じゃ》
《これくらいであろうかの？　因みに死ぬと転生まで休眠状態に以降するゆえ、油断はせぬことじゃ》

フェルの注意に了解ッと答える。
説明を噛み砕いた結果、つまりはリアルなＲＰＧの世界ってことだろうと認識した。
もしかしたらそれは間違いなのかもしれないし、駄目なのかもしれない。
しかし、どうも危機感が沸かないので仕方がなかった。

取り敢えず買った剣を軽く握り、何度か素振りして手に馴染ませた後。
一番近くに見える魔物であろう点に向かって走り出した。
迷宮探索一日目の始まりである――――

染（後書き）

後書き

申し訳御座いません。
期待させておいて？　戦闘や本格的な迷宮探索は次にまわされましたw
今回は説明過多な話だったので、次回は説明より状況描写を増して送りたいと思います。

それでは、感想や評価に誤字脱字、アドバイスを含めて随時お待ちしております！

捌

如何せん、この草原主体の世界、迷宮一層は予想より広い。
フェルの言う魔物を見つけてそこに行くこと自体が一種、苦行とすら言えた。

「それにしたって、広すぎなんじゃないですかね？　フェルさん」
《エニシが軟弱なだけよ。そなた、前回は生身で音の世界すら越えておったのだぞ？》
「そんな化け物と一緒にしないでくれ……」

周囲に人は居ないからと、脳内で会話をするのではなく、口に出して話す。
こっちの方が疲れないという理由もある。フェル曰く、その会話も一種の魔術の域に入るのだとか。
というか音を越えるとか、それ本当に生き物なのかと思うのは仕方がないだろう。
物理法則的にどうなっているのか、なんて言うのは無駄なのかもしれないが……

《む。ほれ、見えてきたぞ》

言われた方向に視線をやれば確かに、距離にしておよそ五十メートル程先の地点に“ソレ”は居た。
一番近くの動いている点に向かって進んでいたのだが、どうやら正解だったらしい。

こちらに気づいた様子はなかった。というより、感知器官があるのかすら怪しい。
大きさは精々が六十センチ四方の塊だろうか。粘着質なぶよぶよの塊で、表面がぷるぷると震え、亀のような速度で移動する“ソレ”。
色は半透明の水色で、中心には核なのか目玉なのか、赤色の球体が蠢いている。

「あれ、だよな？　魔物って……一応聞いておくけど、名前分かるか？」
《ふむ、スライムじゃな》

某ゲームのとんがりのあるスライムとは大違いだった。ぷるぷる、僕、悪いスライムじゃないよ？　の有名な台詞の影すら見えない。
あえて言うならアメーバが近いだろうか？　あそこまで不定形じゃないようだが、全体的な形を考えるとそれが一番近いだろう。
洋ゲーで出てきそうな見た目で、グロテスク極まりない。これで色がもっと極悪だったら、近づきたくなかったかもしれないとエニシは思う。

「あれって、酸性とかってこと、ないよな？」
《いや、酸性ではないが、アルカリ性だったと思うぞ？　尤も、取り込まれてから何週間と掛けてジワジワと溶かされるような、そんな程度ゆえ、そう心配するほどではなかろうて》

いやいや、全然よくないですよと内心で突っ込む。

あの大きさからして飲み込まれる心配はないとしても、溶かされる危険性があるだけで腰が引けた。
というか、あんなのに溶かされて終わりとかあまりに情けない、嫌すぎる。
だからと言って、このまま何もしないという選択肢は取れそうになかった。
興奮は未だ危険を前にしても治まらず、余計苛烈となって苛んでいる。目の前の生き物に果敢に襲い掛かり、握ったブロードソードで突き、斬り、払えと本能が叫んでいた。
ふと、単細胞生物こそが最強なのだ、という言葉が浮かんだのだが直ぐに掻き消える。

「よし、どうせ何時かはやらないといけないんだしな。ここで尻尾巻いて逃げ出すなんて、元からありはしないんだ……行くぞッ！」

型なんて知った事じゃない。そもそも武術なんて心得はないんだから、重心にだけ気を配りつつ走り出す。
右手を右後ろに流し、左手を胸の前、やや左に傾いた形で走破！
五十メートルの距離を流れるように詰めていくッ。
スライムがこちらに気づいたのか、体表面をぶるぶると震わせたかと思うと……

「――――ガッ！？」

凄まじい衝撃が身体を走り抜けたッ！
まるでハンマーで脇腹を殴られたような、ボクサーのストレート

が直撃したかのような、そんな重い一撃。
何が起きたのか理解できない。無様にごろごろと地面を数メートル転がり、落ち着いたところで胃液を地面にぶちまける。

「ゲホッ……ゲホッ――」
《……想像以上の雑魚さよな。まさかスライムの一撃でやられるとは思わなんだぞ？》

まともに返事が出来ず、その場で呼吸を整えるので精一杯。
フェルの台詞で脇腹に一撃を貰ったのだと理解した。
油断していた、見た目に騙された。遊びだと、迷宮の一層だからと、高を括っていた。
侮っていた、侮辱していた、余裕だと楽観していた。
その代償がこの一撃、今も痛みがじわりじわりと侵食するこのダメージが駄賃。

やってくれた、とエニシは呟く。
無様だと囁く。よろよろと立ち上がる、状況を確認。
スライムはゆっくりだが近づいている、のんびりしている暇は無い。
損傷軽微、死ぬ前にあの不気味野郎二人との駆け引きの方がまだスリリングだった筈だ。
深呼吸一つ、肺腑が酸素を吸引してエネルギーに変換する。
――――行けるッ！

「らぁっ！！」

地面を蹴り、そのまま爆走！　先の一撃の正体であろう触手の一撃をバックラーで受け流し、そのまま距離を詰めブロードソードで掬い上げるように斬り付けるッ！

この程度じゃ駄目だと、触手を弾きつつ幾度も斬り付ける。

我武者羅に、技術なんて必要とせず、一撃一撃に倒すという“意思”を込めるッ！

「ッ――」

受け損ねた一撃が掠すり、鋭い痛みにしかしその悲鳴を飲み込む。

次の一撃を放たれる前にその触手を斬り飛ばし、その面積を削り取っていく。

そんなお互い引かぬ有限の戦いを何度となく繰り広げる。

穿ち、削り、まるで獣（けだもの）のように、理性というよりは本能に従って剣を振るう！

打撲になりそうな一撃を時々貰うも、代償として相手の触手を斬り飛ばし、最底辺の魔物と一進一退の攻防を繰り広げる！！

『――ッッ！？』

スライムが何か声にならない振動を空中に撒き散らす、とうとう一撃が核を貫いたのだッ！

深々と突き刺さった核を中心にびくびくと震え、やがて形を失い溶けるように地面に流れ出す。

その姿が粒子となってエニシの身体に吸い込まれ消えて行く。

恐らく生体エネルギーの搾取だろうとあたりをつけ、予想以上に

疲れた肉体を草原に横たわる形で休めようとして――

「……なんだこれ？」

スライムが完全に消えた後、その場には如何にも宝箱と言った風情の木製に金属で補強した、典型的な某箱がいつの間にか出現していた。

色は金属の部分が金色で、木製の部分は自然色のままだ。

《ふむ、見た目どおり。宝箱じゃな》

「え？　いやいや、魔物を倒したら宝箱が出ましたって……」

《この世界はあらゆる超越存在達が創りし世界ぞ？　常識などあってないようなものであろうて》

そう言われてしまえば反論の余地はない。

フェルの言うとおり、天外の存在をエニシがどうこう言ったところで計れる筈もないのだ。

改めて宝箱を見るも消える様子はなく、罠の類も素人目で確認する限りは無さそうであった。

《安心するがよい、その宝箱はようは“褒美”なのよ。宝箱にも種類があるのだがの、色が金・銀・銅の順で基本中身の質が変化する筈じゃ。因みに他色もあるが、滅多に出るものではないゆえ、今は省くとしよう。今回は初戦闘の祝い、といったところであろうかの？　因みに神の祝福にはこの宝箱の出現率を増加させる効力もあるのじゃ》

成る程、と頷き、問題がないのならと早速開けてみることにする。
フェルの言うとおりならば、金であるこの箱には良さそうな物が入っている筈なのだから。
鍵穴の部分に金具がついており、それをパチンと上に押し上げ、ゆっくりと上部を持ち上げる。
基本が木材とはいえ金属で補強されている為か、中々に重い。最後まで上げれば、ガコッと音がし、中の物が姿を現す。

「兜？　いや、仮面の類……なのか？」
《ほう、装備の類であったか。広げてみよ》

宝箱から出てきたのはどうやら仮面の類らしく。
重さは信じられないほど軽いらしく、手にとって眺めてみる。
見れば見るほど珍妙な形をした仮面であった。
種類的にはオペラとかの西欧的な部類というよりは、能などにでも使われそうな物なのだが、それにしては覆う部分が全体に及ばなく、様式も不明である。

《ふむ、詳しくは鑑定士の元に持って行かねばならぬが。恐らくは特殊な強化魔術が掛かっておるな。妾も見たことのない仮面じゃが、鬼面になるのではないかの？》

言われて見てみれば成る程、仮面の上部両端には角らしきものが生えている。
質感は滑らかで、どこか無機物には思えない、生物的躍動と力強

さを感じる。
ふと、仮面の大きさを見て――

「これ、明らかに大きいんだが、大丈夫なのか？」
《何、そのタイプは多少身体の大きさに合わなくて小さくないのならば装備できるゆえ、心配は要らぬであろう。それに、装備すれば分かるが、伸縮する筈じゃぞ。ふむ、折角だ、一度戻るとしようかの、その仮面も鑑定せねば装備出来ぬゆえな》
「本当にＲＰＧみたいだな……そう言えば、どうやって迷宮から戻るんだ？」

来る時はあのポータルで来たが、こんな大草原にポータルなどある筈もなく。
ある意味当然の疑問を忘れていたことに愕然とする。
《なに、簡単なことよ。一言、“リコール”と呟けばよい》

そんな簡単な言葉で良いのか？
と思いつつも、フェルが嘘をついても何か益になる訳でもないと判断し呟く。
「リコールッ！」

すると、全身が眩い光に包まれ、視界が白色の光に包みこまれる。
それはあのポータルの時とまったく同じ現象であった――――

捌（後書き）

後書き

ちょっと字数は少ないですが、元は三千程度を予想していたので、これくらいが本来の文量です。
今回、予想以上にスライムは手強かった！　的な回でしたw
まぁ、それじゃあレベルUPが遠いので、次回からはマシになる予定ですが。

それでは、感想・評価、誤字脱字やアドバイスは随時募集しております！

玖（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。
今回の話しの際、一部設定が変更されました。
タルタロスのお金＝迷宮で得られるポイント。
宝箱で入手したマント＝怪しげな仮面。
以上が変更点となります。

玖

「っと……ここはポータルか？」
《左様、リコールは登録したポータルに自動で帰還するようになっておる。登録方法はポータルを起動し、ウィンドウの帰還登録から行えるゆえ、覚えておくがよかろうて》

光が晴れた後出た場所は宿屋、シュピーゲルの近くにあるポータル前であった。
フェルがざっと仕組みを話してくれた後、再び口を開く。

《さて、鑑定所に行かねばなるまいな。一度ポータルに触れよ》

言われるままにポータルに触れる。
すると、例のウィンドウが一瞬で光子から結晶化、物質化していく。
その様子に無駄と知りながら、光子の物質化なんてどんな理論なんだ？　という疑問が浮かぶ。
やがて数秒に満たない時間で、完全な仮想ウィンドウとして立体化した。

《マップという項目があるであろう。それはそのポータルを中心として、段階的な地図を表示するゆえ、先ずはそれで現在地と、目的地を探し、必要ならポータルで移動するのが定石よな》
「なるほど。最初聞いた時は、その広さに驚いたけど、上手く出来

ているもんだな」
《まっ、この辺はそうでもないが。人通りが多いと、ポータルの利用も大変なのだがのぉ》

そう言って渋面をするような雰囲気がエニシへと伝わる。
もしかしたら過去嫌な思いでもしたのかもしれない。神がタルタロスに来れるかは不明だが。
言われた手順どおり、ＭＡＰと書かれた項目に指を滑らせると、この辺り一帯の地図が別ウィンドウで表示された。
ポータルを中心とした半径十キロ、そこから更に倍率を可変出来るようになっている。

ＭＡＰには色々なマークが印されていた。
例えばポータルなら小さな球状のマーク、宿屋なら宿のロゴ、武器・防具なら剣か鎧のマーク。
他にも多くの様々なマークが犇いていて、想像出来るものから、一体どのような意味なのかまったく持って不明な物まで多種多様であった。

フェル曰く、ルーペのマークだと言う鑑定所はどうやらこの辺りにはないらしく。
仕方なしと倍率を一段上げる。すると大よそ二倍近く地図が広がった。
試しにそこから更に倍率を上げてみれば、更に倍に広がる。
成る程と頷き、一段下げると目的のマークを探し出す。

ふと、丁度倍率四倍のＭＡＰの一角、とある一点に多くのマークが重なり合うように混在する場所が目に付く。
武器屋や防具屋、目的の鑑定所は無論、検討の付かない類の物まで、ざっと見ただけでも十以上は優に割拠しているようだ。
すると、当然とある疑問が脳内をコサックダンスで存在を主張し始める。

「なぁフェル、ここって何かあるのか？」

取り敢えず分からなければ質問だ、と言うことで困ったときのフェル頼み。
扱いが何となく青狸に近いかもしれないと、エニシの脳裏に一瞬浮かぶもまぁいいやと振り払ってしまう。

《ふむ。恐らくじゃが……市があるのであろう》

姿は見えずとも、覗き込むような気配が伝わり、一瞬後返答が返ってくる。

「市って、あの市？」
《どの市か知らぬが、恐らく微妙に違うであろうよ。この場合の市と言うのはの、人の集まり易い場所に自然他の店が集まり、更にそこから迷宮挑戦者達の露店なんかが集まって出来た広場や界隈を指す。規模で言えば中規模であろうが、そこもそう言った類のものであろう》
「へぇ、なんかまるでリアル・オンラインゲームって感じだなぁ」

呟いて、本当そうだよなぁと思わずにいられない。
ネット小説のＶＲＭＭＯＲＰＧも元を辿れば、この世界を感知したのがネタなのだろうか。
と言ってもこの世界の管理者は人ではなく、よく分からない化物どもであり、しかも人を見ては暇潰しときたもんだ。
今はまだ今一実感というよりは、憧れの迷宮への挑戦という思いが占めているが、気をつけないとどこかで痛い目を見るかもしれないと気を引き締める。

「んじゃ、その市場ってやつに行って見ますかね。んと、距離は……遠いな。距離にすると二十五キロくらいあるんじゃないのか、これ」
《大抵市の近くはポータルが複数ある筈じゃ、行きは楽ゆえ、一番近いのを選ぶがよかろう》
「諒解（りょう）」

ざっと視線を走らせれば確かに三箇所もポータルがある。
市の中枢に位置したものを選びさっと指で触れた。
瞬間、三度目となる光が視界を多い、足元がふわりと浮く感触と共にジャットコースターのような心臓に悪い浮遊感――

瞳を開ければ宿屋の広場をより大きくしたような場所に出た。
町並みは明治と言った風情らしく、微妙に屈折した洋館やら和館やらが混ざっている。
人も多く、周囲に視線をやれば優に百名以上は目に映った。それ

も視界の一部なのだが。
市場全体でなら千人は優に越えていることだろう。

《む、どうやら無事着いたようじゃな。鑑定所の位置をポータルでもう一度把握しなくて大丈夫かの？》
《ああ、この身体は物覚えがいいからな。しっかりと記憶してるようだから大丈夫だろう》

そう告げて歩き出す。
風景は古き良き風情だと言うのに、歩く人々は総じて外観にそぐわない事甚（はなは）だしい。
それこそ現実感を喪失しそうな程、である。格好も地球からすればコスプレより酷い上に、頭髪なども信じられない色合いの人種のなんと多いことか。
同じような白人や黄色人種、黒人は良い。そこに所謂“獣人”だとか、“エルフ”だとか、果てには何の部類なのか知れない人種など、多種多様に溢れていた。

ハッキリと言って浮いている。エニシが、と言うのもあるがここは別の意味だ。
この明治風の景色からまるで水と油のように浮いてしまっていた。
それも地球から来た為なのかもしれないが……
広場こそあちらこちらで威勢の良い声が聞こえたのだが、道に出ればそう言った喧騒はなりを潜め、露店主らしい人物が地面に商品を置いており、それを人が通りざまに見ていく、という感じである。
現代人的感覚からすれば、盗難とかが心配になるような光景だ。
ふと、周囲の話し声を聞いてとある事実にと言うか、今更ながら

にある部分に思い至った――

《どうして周りの言語が全部日本語なんだ？》
《タルタロスではありとあらゆる言語が、受信者の都合の良いように変換されるのじゃ》

その言葉の意味を一瞬理解出来なかった。いや、したくなかったというのが正鵠か。
無限とも思える言語の数々、それを遍く一切漏らさず変換する技術、あるいは妖術とも魔術とも呼べばいいのか。
どちらにせよそれ程の事実を可能足らしめる力とは一体どれ程なのか、改めてその恐ろしさに背筋が薄ら寒くなる。

《どうしたかえ？》
《いや、なんでもない》

不審な気配でも察知したのか、フェルが何気ない質問をしてくる。
その問いに自分自身に言い聞かせるように返した。
電信柱のない明治風の町並み、何となく日本人だからか懐古の念に近い思いがエニシの胸に湧き上がる。
その大広場より一本、二本、三本とメインストリートを外れていく。

歩き始めて十分近く、目的の鑑定所が姿を現した。
路地裏と言うほど寂れてはないが、人通りの侘しい道の一角に佇

んでいる。
ガラス張りのショーウィンドウにはエニシには良く分からない品々が並び、奥のカウンターには店主らしき人物が座しているのが覗えた。
マップ機能があるとは言え、客足が良さそうにはどうも思えない立地と言えた。

――――カラン、コロン……

「いらっしゃい」

飴色の木製ドアを開けると客の来訪を告げる鐘が鳴り、初老の域に差し掛かるであろうややしわがれた声が耳に届いた。
声のした方に歩を進めるのと同時、店内をさり気なく見やる。
ショーウィンドウと同じく、何に使うのか不明の品や、仮面や装飾品、曰くありそうな武器などの品などが雑多に飾られている。
他にもガラスケースが並び、同じような感じで品が納められているらしく、これが時計や宝石なら日本で開店してても通用しそうな雰囲気であった。
アンティークショップとしてなら、もしくはこのままでもいけるかもしれないが。

「鑑定が希望かね？」
「はい、これなんですが」

ブレザーの懐から宝箱から入手した仮面を取り出し、カウンターの上に乗せる。

品の良い口髭に、白髪を後ろに流し、モノクルを装着した老人がそれを手に取り真剣な表情で眺めだす。
鑑定と言うにはあまりに鑑定らしい姿。矛盾した言葉だが、想像と違ったため残念感が五割と残りは安堵感だろうか。
もっとこう、超常的な行為でやるのかと思っていた為、少々拍子抜けであった。

「ふむ。見た所まだタルタロスに着て日は浅いだろう？　これは何層目で？」
「先日来たばかり。そっちのは一層目の初戦の宝箱から出てきた」
「そうか……」

そう言ったきり再び仮面を眺めだす。
五分程、モノクルで観察したり、手触りを確かめたりした後、再び口を開いた。

「名は『解放者の面』効果は段階式開放型じゃな。十レベル毎に様々な能力が開放されるようになっておる。一レベルでも一つ開放されておるから、装備してから見てみるのがよいじゃろう。ただし、これにはどうやら呪いが掛かっておるようでな、一度装着した場合、特殊な解呪方法以外は外せなくなろう。ちと、変わった装備じゃが、能力は恐らく一級品じゃろうて。一層目で出たと言うのが信じられんほどじゃよ、大事にするがよかろう」
「サンキュー！」
「また何か見つけたら持ち込むがええ」

返して貰った面を片手にナイスミドルな鑑定士の翁に手を振り、店を後にする。
この鑑定自体にポイントは必要ない、というのには驚いた。
なんでも鑑定士をやっている人物は、望んでその職に就らしく、その望みそのものが様々な未知の品物に触れるということらしい。
つまり、鑑定そのものが報酬となっていると言うことだ。

《して、その面を装備するのかえ？》
「ぁあー、装備するのは良いんだけどさ、この面、どっかで見たことある気がするんだよなぁ……」

宝箱から取り出したときは、しっかりと観察しなかった為、改めて見れば随分特徴的な面であった。
種類的には鬼面、と呼ばれる類なのか、額にあたる部分の両端は天に向かって一対の角が生えている。
長さは恐らく十五センチにもなるだろうか？
額の中央に当たる部分は仮面の真上から逆T字の切れ込みが入り、縦の切れ込みの両横には一センチ程の同じ縦の切れ込みが入っている。
こちらは逆T字と違い、仮面の外までは抜けていない。

額から鼻はどうやら覆わないらしくそこから左右に別れ、口元は覆わず牙の形でその少し両上で止まっている。
平面ではなく、顔の形にあわせて凹凸があり、眉の近くは盛り上がり、鼻の部分も同じく。逆にその両側はやや凹み気味だ。
色は見事な白色で、材質は木や鉱石というより、その色も相俟っ

て“骨”のようである。
というより、その奇妙な形といい何かの生物の頭蓋、その前部をそのまま取り外したかのような印象であった。

流石にそれは考えすぎかもしれないが、超常的な雰囲気、異彩とも言うべきものを放っている面だ。
奇妙な点と言えば、その目に当たる部分は空洞となっているのに、黒いと言う点だろうか。
誇張でも何でもなく、ひたすらの暗黒。闇に包まれていて光すら反射も通しもせず、表からも裏からも先を見通すことが出来なくなくなっている。
着けたが最後、視力が失われる、なんて言う事態は勘弁であった。
奇妙なフォルムながら、着ける人が人なら似合わないでもない。そう思える程度には奇抜ながら、一種芸術的ではあるのだが、やはりどこか見覚えがある。

何かのアニメかゲームにでも、近いものが出たのかもしれない。
と、そう考えて思考を放棄してしまう。
フェルの言う通りなら、一部のゲームやアニメなんかは別世界を模して考えられた、なんていう事も十分にあり得る。
それならば、この仮面もそういった世界のオリジナルか複製品の可能性もあるだろう。

「ここで着けるのは流石に恥ずかしいからな、一度迷宮に行こう」
《ふむ、あい分かった。しかし、注意せよ？　今はまだ日が高いゆえ問題はないが、夕暮れ以降、夜は魔物の種類が変わりおる。しかも昼より数段強力、凶暴とくるゆえな》

「諒解！」

仮面を観察しつつ、広場まで移動し。
数人集まって、気後れしそうになるポータルを起動する。
行き先は予想外にスライムが手強かった迷宮第一層目だ。

指先を一層目と書かれた部分に当てれば、最早馴染みの光が目を覆い、浮遊感が訪れる。
僅か数秒。気づけば、あの大草原に再び立ち戻っていた――――

玖（後書き）

後書き

某仮面です。
微妙に形や特徴は変化していますが、仕様です。
あれって石仮面みたいですよねw

何のことか分からない？　それならそれで良いのです。
因みに、この仮面付けると、瞳がターミ〇ーターの如く赤光を放ちます。
外円は黒く、中央は赤の光点。
作者は厨二病を発症したようです――

迷宮がずれ込みましたが勘弁をw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0464o/

転生迷宮

2010年11月3日07時03分発行